【登場人物表】

桃	桃色の４Ｇスマホ
銀河	銀色の５Ｇスマホ
若山　秋寛（２０）	フードデリバリーの配達員
蘭野　亜理紗（２０）	フリーター
ルナ（２２）	キャバ嬢
若山　智（４７）	秋寛の父
若山　千穂（４５）	秋寛の母
蘭野　瞳（４１）	亜理紗の母
ルナの父（５０）	
マネージャー（３６）	キャバクラの男性責任者
パーちゃん	シニア向けの４Ｇスマホ
ラメぽ	ギャル向けの４Ｇスマホ
正子	純白の４Ｇスマホ
忠男	タブレット
アイ１５世	iPhone15
店長（４３）	スマホショップの店長
店員Ａ（２４）	スマホショップの店員
男Ａ（２８）	スマホショップの客
ドクロ	男Ａの５Ｇスマホ
女Ａ（４９）	スマホショップの客
妻（２９）	マネージャーの妻
社長（５４）	キャバクラの社長
黒人男性（７０）	観光客
浮世絵	黒人男性の５Ｇスマホ
配達員Ａ（３０）	フードデリバリーの配達員

○　スマホショップ・外観

爽やかな秋風がそよぐ都内のオフィス街にある開店前のスマホショップ。ビルの壁には様々なキャリアのロゴが描かれた看板があり、店先の街路樹には穏やかな日差しが当たっていて色づき始めた紅葉を映えさせている。

○　同・店内

開店前の狭めの店内にはキャリアごとに陳列されたスマホが並んでいる。そこで外から女性の店員Ａ（２４）がシャッターを開けるとオフィス街のビルの隙間に留まっていた日差しが一斉にスマホ達を照らし始める。そこへ配送業者が走ってやって来て段ボールの荷物を店員Ａに渡す。店員Ａは店内のカウンターに向かい、男性の店長（４３）に荷物を渡す。店長が荷物を開けると中には桃色のスマホの箱が十数個入っている。全て新品だが箱は少し色褪せている。それを見て思わず眉を顰める店員Ａ。

店員Ａ「……え、店長コレって４Ｇですよね？」

店長「本部の倉庫に眠ってたヤツだ。今時売れねーよな、いくら格安スマホっていっても」

店員Ａ「ですね……どうします？　陳列」

店長「勿論アウトレットコーナーだ。１台展示しといて、さっさと売っときたいから」

店員Ａ「はい、了解です」

店員Ａが桃色のスマホの箱を一つ持ってカウンターから出て行く。

その先には格安スマホ売場があって奥のアウトレットコーナーには使い古されたシニア向けの紫色のスマホとＳＩＭフリーでラメ入りピンクのギャル向けスマホの展示品が陳列されている。

店員Ａはその二つの展示品の間に真新しい桃色のスマホを設置し始める。

そこで紫色のシニア向けのスマホが
誰も触れていないのに起動する。
店員Ａ「（気付く）アレ……？　店長、この子
また勝手に動いてますけど」
店長「なに？　またゴーストタッチかよ。まあ、
熱暴走し易いんだろーな」
店員Ａ「ずっとケーブルに繋がれてますからね」
店長「酷いと熱くなって勝手に電源落ちたり、
メール送ったり、電話も掛けたりするしな」
店員Ａ「ですね。でも実はそーやってスマホ
同士で繋がり合ってたりして」
店長「ハア？　なにバカな事言ってんの？」
店員Ａ「いや、出来んじゃないすか？　スマホ
はＡＩ積んでるから。会話とか喧嘩とか……
恋もしたりして。しかもメチャ純愛の」
店長「恋？　んなバカな」
店員Ａ「え、だってスマホも恋も一緒じゃない
ですか、熱くなり過ぎると落ちるのは」
店長「何だソレ。てか、昔からＡＩの暴走って
のは人類への反乱って決まってんだよ」
店員Ａ「あー、開発者は薄汚い博士っていう」
店長「そう、まず殺されるフラグ立つヤツな」
店員Ａ「てかＡＩって絶対冷静沈着っすよね」
店長「あー、『２００１年宇宙の旅』とかもな」
店員Ａ「いたら面白いのに、ギャルなＡＩとか」
店長「ソレは何か嫌だろ。『人間マジうぜー、
ＡＩしか勝たん！』って襲って来られても」
店員Ａ「確かに。ってソレもう死語ですけど」
店長「え、マジで？　しょーがねーだろ、俺は
松坂世代なんだから」
店員Ａ「……え、何ソレ……？」
店長「あ、若い子は知らないか……」
店員Ａ「……あ、戸田恵梨香の旦那の？」
店長「ち、違うッ！　松坂桃李じゃねーッ！」
店員Ａ「え、まあ歳が違うか……てか、ギャル
じゃなくてお婆ちゃんＡＩだったら？」
店長「絶対似合わねーだろ。シュワちゃんの
決めゼリフ、『アイル・ビー・バック』が。
ＡＩの反乱と言えばアレだからな」
店員Ａ「……あ、格闘技挑戦した時のすか？」

店長「違うッ！　フワちゃんじゃねーッ！」
店員Ａ「そーなんすか。まーでもお婆ちゃん
　ならＡＩでも介護とか必要になってくるか」
店長「そう、車も運転手付きだろ。タイトルは
　『シン・ドライビング Miss デイジー』だな」
店員Ａ「……あ、村上春樹が原作の？」
店長「違う、ドライブ・マイ・カーじゃねーッ！」
店員Ａ「そーすか。でもＡＩは自らは暴走しな
　いと思うんですよ。だってＡＩは人間だけが
　作って、人間だけが使って、人間だけが価値
　が分かる物じゃないですか。だから自殺行為
　でしょ、暴走して生みの親の人間殺したら」
店長「でも外国のＡＩ差別的な暴言吐いてたぞ」
店員Ａ「それは学習した結果じゃないですか、
　人間が生み出した醜くて汚い乱暴な言葉を」
店長「ま、まあ、そうか……」
店員Ａ「なんで暴走っぽく見えてもそれは開発
　した人間が暴走させてんすよ。だから絶対に
　ＡＩは自らは暴走しません、するなら恋です。
　ＡＩに罪は無い。てか、今の世の中じゃ暴走
　してんのは人間の方だと思うんですけどね。
　いるじゃないですか、無敵の人とか」
店長「まあ、最近多いな……」
店員Ａ「だからこれからの世の中は賢くて純愛
　な恋もするＡＩ達がゴーストタッチを駆使
　して人間の暴走を食い止める……なーんて
　日が来るかもしれませんよ……」
　　店員Ａが桃色のスマホにケーブルを
　　繋ぐと鮮やかな画面と共に起動する。

○　タイトル
　　『純ＡＩゴーストタッチ』

○　スマホショップ・店内
　　作業を終えた店員Ａが離れて行く。
　　そこで起動していたシニア向けの紫
　　色のスマホが人間の知らないＡＩの
　　力によって年配女性風に話し出す。
紫色「まあ、可愛い桃色のお嬢さんね。私は
　パープルだからパーちゃんって呼んでね」

（※話す時はスマホの画面がチカチカ点滅する）
桃色「（真面目な若い女性風に）は、はい。よ、よろしくお願いします、パーちゃんさん」
そこでラメ入りピンクのスマホの展示品も勝手に起動する。
ラメ入り「（ギャル風に）てか、バーちゃんな。この店に何年もいるババアスマホだからー」
パー「な、何よラメぽ、失礼ねッ！　私は余りモデルチェンジしないだけよッ！　アンタこそＳＩＭフリーで誰とでもＯＫの尻軽ギャルスマホじゃないッ！」
ラメぽ「ハアッ？　ババアマジうぜーッ！　今時のスマホは乗り換えしか勝たんッ！」
パー「フッ、アンタやっぱりアウトレットね。その言葉もう死語よ」
ラメぽ「う、うっせーッ！　てか最悪ーッ！　新入り、ウチとピンク被ってんじゃんッ！」
桃色「す、すいません……」
ラメぽ「それにさー、新品だから当然５Ｇかと思ったらー、ウチらと同じ４Ｇだしー」
桃色「は、はい、そうなんです……あ、あの、この話って店長さん達に聞こえませんか？」
パー「大丈夫。ブルートゥースで話してるから」
桃色「そうなんですね、良かった……」
パー「でも私達がこうして会話したり、自分の意志で動いてるのを人間さん達はゴーストタッチって呼んでるのよ。酷いと思わない？　ゴーストだなんてホント失礼しちゃうわ」
ラメぽ「そーそー、幽霊ってかお化けだからー、特に鬼ババアスマホはー」
パー「ハアッ？　アンタこそきったないギャル、ヤマンバスマホでしょッ！」
ラメぽ「……え、何ソレ……？」
パー「あ、若い子は知らないか……」
ラメぽ「……あ、猫を上に乗せたまま部屋を掃除する動画がバズるヤツ？」
パー「ち、違うッ！　ルンバじゃねーッ！」
そこでパーの隣に設置された純白のスマホの展示品も勝手に起動する。

純白「(上品な中年女性風に) あの、ケンカは
今すぐやめるべきだと思います。新入りさん
には安心して過ごせるお店だと思って頂く
べきだと思いますし、そろそろお客様もいら
っしゃる頃だから静かにするべきでは？」
パー「あ……せ、正子さん。そうね、その通り
だわ。ごめんなさいね」
ラメぽ「(舌打ち)今度はクソ正論オバハンか。
ベキベキうるせーんだって黙れッ！」
正子「ま、またそんな汚い言葉ッ！　いくら
ギャルでも言うべきではありませんッ！」
ラメぽ「だから、その『べき』やめろってッ！
正論ばっか言ってマジうぜーんだってッ！」
パー「ま、まあまあ……そ、それよりも早く
新入りさんのお名前考えないと……えっと
そうね……ピンクって言うより桃色だから
桃、桃ちゃんでどう？」
正子「まあ良いお名前。それにするべきだわ」
桃「は、はい、ありがとうございます」
ラメぽ「(何故か笑う) キャハハッ！　モモ
だってウケる。鶏肉かよ、チキンかよッ！」
桃「……え？」
パー「バカね、また漢字変換間違えてるわよ。
足の腿じゃなくて果物の桃よ」
ラメぽ「え、マ、マジか……」
パー「ホントおバカね、業界で一番やっすい
ＣＰＵ積んでるからよ。同じＡＩとして恥ず
かしいわ。桃ちゃん、相手しちゃ駄目よ」
桃「は、はあ……」
ラメぽ「だ、黙れババアッ！　ヤバい客に有害
アプリ勝手にダウンロードされちまえッ！」
そこで店で一番高い場所に置かれた
iPhone15 の展示品が起動する。
iPhone「(王様風に) なんじゃ騒がしいのう。
何事じゃ？　忠男(ただお)」
iPhone15 の下の棚に陳列されたタブ
レットの展示品の『忠男』も起動する。
忠男「(中年男性風に)黙れコラ下級スマホッ！
お困りだろが、アイ１５世様がッ！」

パー「も、申し訳ございませんアイ１５世様。
新入りさんが来たものですから……」
アイ１５世「そうであったか……ん？　その
桃色の娘、えらくべっぴんじゃのう」
桃「え、あの……どちら様ですか？」
パー「桃ちゃんあのお方はね、あのアップル
王朝の新しい王様、アイ１５世様よ」
ラメぽ「知らねーの？　ウチらとはレベチの
５Ｇ上級スマホ様だってー」
正子「そうです。スマホカースト最上位のお方
なので敬うべきです」
桃「そ、そうでしたか、失礼致しましたッ！」
忠男「おい娘ッ！　ちゃんと覚えておけッ！」
ラメぽ「（舌打ち）なんだよ忠男、偉そうに」
忠男「な、なにッ？　黙れ最下級スマホがッ！」
ラメぽ「ハアッ？　お前こそ黙れ偽iPadッ！
アップル王朝の一族じゃねーだろがッ！」
忠男「黙れッ！　俺は一族でなくてもアイ１５
世様に忠義を尽くすんだッ！　忠男のタダ
は忠義のタダだぞッ！」
パー「桃ちゃん違うわよ。忠男のタダは無料
のタダよ」
桃「え、そうなんですか？」
ラメぽ「だって大抵タダで配ってんじゃん、
偽iPadってー」
忠男「そ、それは少し前の話だ。今は違うッ！」
パー「どーせアップル王朝に擦り寄ってるのも
iPadサンと間違えて買って貰おうって魂胆
のくせに」
正子「そうです桃ちゃん、忠男は姑息で嫌な奴
なので関わるべきではありません」
桃「そ、そうなんですか……」
忠男「黙れッ！　騙される客が悪いんだッ！
何を下級スマホの分際で偉そうにッ！」
パー「もう、偉そうなのはどっちよ。桃ちゃん、
忠男と話してると気分悪くなるだけだから
お話はこれまでね……」
桃「は、はい、ではまた……」
スリープ状態に戻る桃とパー。

○　繁華街の裏通り（夕方）
飲み屋が数多く入居する雑居ビルが
連なる日暮れ時の薄暗い狭い道。
そのビルの一階にあるキャバクラの
裏口が開くと、スーツの袖口からタト
ゥーが覗く強面のマネージャー（３６）
がボーイ姿の若山秋寛（２０）の背中
を勢いよく突き飛ばす。
秋寛「マ、マネージャーすいませんッ！　もう、
もう絶対遅刻しませんからクビだけはマジ
で勘弁して下さいッ！」
マネージャー「ハア？　何回言うんだその台詞」
秋寛「もうこれが最後なんで、約束しますッ！」
マネージャー「聞き飽きたって。てか何とかし
ろって社長からも言われてんだよ。じゃーな」
ドアを閉めようとするマネージャー。
慌ててドアに駆け寄る秋寛。
秋寛「困るんですッ！　クビにされるとッ！
俺こういうとこ以外で働けないんでッ！」
マネージャー「ハ？　ああ、お前中卒だったな。
だったら肉体労働でもやればいーだろが」
秋寛「いや、時間の融通利くとこじゃないと。
俺の母親最近体調悪いんで……」
マネージャー「だからってな、皆お前の都合に
合わせて仕事する訳にいかねーんだよッ！」
秋寛「わ、分かってますッ！　だ、だからもう
絶対に遅刻しませんからお願いしますッ！」
必死に土下座して頼む秋寛。
そこで隣のビルから配達を終えたフ
ードデリバリーの配達員が出て来る。
マネージャー「（気付いてアゴで合図）オイ、
アレだったら中卒でも誰でも出来んだろ」
秋寛「え、で、でも、俺免許もバイクも持って
ないし……」
マネージャー「ならそこのチャリ持って帰って
いーからさっさと消えろッ！」
裏口に放置された赤色と青色の２台
の錆び付いて壊れたママチャリを指
さすマネージャー。
秋寛「え、で、でも壊れて……」

すかさずドアを閉めるマネージャー。
秋寛「あ、ちょっと、ちょっと待って下さいッ！」
慌てて秋寛がドアに駆け寄るも無情
にも鍵の掛かる音がする。
悔し気に膝から崩れ落ち、その場に突
っ伏して泣き始める秋寛。
そこへまたドアが開き、仕事を終えた
派手な格好のキャバ嬢のルナ（２２）
が大きなバッグを抱えて出て来る。
ルナ「……だ、大丈夫？　秋寛くん」
秋寛「（顔を上げて）ル、ルナさん……」

○　静岡刑務所・外観（夜）
赤黒い夕闇に覆われた刑務所の全景。
門には『静岡刑務所』の文字。

○　同・娯楽室（夜）
大勢の囚人服姿の受刑者達がいる。
一番後ろの席には知的なメガネ姿の
若山智（４７）がいて、一人で宇宙工
学の本を穏やかな表情で読んでいる。
そこでテレビのニュースがペットホ
テルで起きた動物の集団毒殺事件の
続報を伝え始める。
智は途端に険しい表情になり、勢いよ
く本を閉じて立ち去って行く。

○　一軒家・外観（夜）
街灯に照らされた都内の一軒家。
塀には赤いペンキで『ペット殺し』と
殴り書きされた落書きがある。

○　同・玄関（夜）
固定電話はあるがその傍には解約手
続き済みの証明書類が置かれている。

○　同・部屋（夜）
大きな本棚には高卒認定試験の参考
書の他に科学や化学等の理系の本、と
りわけ宇宙関連の本が並んでいる。

傍にある机の上には工具や機械のパーツが散乱していて、中央には製作中の小型のロケットらしき機械がある。

○　同・寝室（夜）

薄暗い部屋のベッドにはパジャマ姿の若山千穂（４５）が横になっている。ベッド脇には秋寛と智と千穂が笑顔で写った写真盾が置いてある。

千穂はうつろな表情でスマホを開くと画面は『ペットホテル集団毒殺事件の経営者の責任を問う』という記事。そのコメント欄には数多くの批判的な意見が並んでいる。

それを見た途端悲鳴を上げてスマホを投げ捨て、布団を頭から被る千穂。

○　公園（夜）

日の落ちた公園に壊れた青色のママチャリと赤色のママチャリがある。

その前のベンチには曇り顔の秋寛。

そこでトイレから大きなバッグを抱えたルナが出て来る……が先程とは違い、清楚な服装でメガネ姿である。

ルナ「ゴメン、お待たせ」

秋寛「（驚いて）え……何か感じ違いますね」

ルナ「家には内緒だから、キャバ嬢してるの。だからいつもここで着替えて帰ってんの」

秋寛「そ、そうだったんすね……ってまさに月みたいっすね、ルナさんって」

ルナ「え……月？　どういう事？」

秋寛「ルナってラテン語で月の事なんです。で、月は自転と公転の周期が地球と同じで……つまり、常に地球に同じ面を向けてて絶対に裏側が見えないんです。だからそんな裏側隠してたルナさんは月みたいだなって思って」

ルナ「へー、そうなんだ……じゃあ、行こっか」

微笑みながら赤色のママチャリを押して歩き出すルナ。秋寛も微笑み返し、青色のママチャリを押し始める。

○　商店街の道（夜）

まだ人通りの多い商店街を秋寛とルナがママチャリを引いて歩いている。壊れたママチャリから出る異音を周囲に響かせながら歩く二人の異様な光景にすれ違う通行人は眉を顰める。

ルナ「……酷いよね、お母さんの看病で遅刻しただけなのにクビって。てかどんな病気？」

秋寛「病気ってか……精神的なもので……実は俺のお母さん……誹謗中傷を受けてて……」

ルナ「え、誹謗中傷？」

秋寛「……最近ペットホテルで動物達が死んだ事件あったじゃないですか。客とトラブった従業員が仕返しにペット毒殺したっていう。アレ俺の母親が経営してた店で……」

ルナ「あの事件……そうだったんだ……」

秋寛「それで経営者の責任だって言う差出人不明の手紙が届いたり、無言電話とかも掛かってきたり、家の塀にも落書きまでされて……」

ルナ「……酷いね……てか、お父さんは？」

秋寛「……それが……今刑務所の中で……」

ルナ「エッ！　そ、そうなんだ。ゴメン……」

秋寛「いえ、実は親父は宇宙工学の大学教授だったんです。でも俺が中学の時実験中の事故で学生を死なせちゃって……それで、多分その影響で高校の合格も取り消されて……」

ルナ「そうなんだ……どこの高校？」

秋寛「……秀文高校です」

ルナ「え、私立のメチャ頭良いとこじゃん」

秋寛「まあ……でも、親父の刑期5年なんで来年の春頃には出所なんですけどね」

ルナ「そっか……でも、誹謗中傷は大変だね。私のパパに頼んであげよっか？」

秋寛「え……パパって？」

ルナ「実は弁護士してるの。秘密にしてたけど」

秋寛「え、マ、マジっすかッ？」

ルナ「うん、だから助けてあげられると思う」

秋寛「ホントすか、じゃあお願いしますッ！」

ルナ「（微笑んで）じゃあ頼んどくね」

秋寛「て、てかルナさんなんでキャバ嬢なんか
やってんすか？　親が弁護士なのに……」
ルナ「……まあ、他の仕事より時給高いし、後
は人間観察かな。だって色んな人いるでしょ、
お客さんとか従業員の人達も……って実は
私舞台女優やってて映画に出るのが夢なの」
秋寛「え、女優？　マジすか？」
ルナ「うん、だから観察した人達の様子を演技
の参考にしてるの。それに夜は劇団の稽古が
あるから昼キャバは都合良いし。まあでも、
映画に出るなんて非現実な夢だけどね……」
秋寛「そ、そんな事無いっすッ！　だって、夢
って見てる人にとっては現実じゃないすか、
眠ってる時に見るリアルな夢と同じでッ！」
ルナ「え……そっか、そうだね……ありがと」
秋寛「いえ……実は俺にも夢があるんで」
ルナ「そうなの？　どんな夢？」
秋寛「宇宙です。いつか絶対に宇宙に行くのが
俺の夢なんですッ！」
ルナ「え、宇宙？」
秋寛「はい。子供の頃からロケットが好きで、
今のよりもっと安くて安全なモノ作ってソ
レに乗って宇宙に行くのが夢なんですッ！
で、宇宙から地球にいる人達に人類の進化を
加速させる希望の光を照らす様な科学者に
なりたいんですッ！」
今までになく明るい表情で話す秋寛。
ルナ「凄いね……ってだからか。秋寛くん前に
言ってたでしょ、ここでバイトしてるのって
大学に通うお金を貯める為だって」
秋寛「そ、そうっす。俺中卒だけど絶対に大学
行って宇宙工学勉強して……ってもう高卒
認定試験受けてて発表がそろそろなんです」
ルナ「そっか、受かって大学行けるといいね」
秋寛「はい……でも国立大学行きたくて二百万
貯めたんすけど……あのペットホテル開業
したばっかだったんで今家に金無くて……
だから貯金はお母さんが元気になる為に使
う方が先だからいつになるか……」
明るかった顔が途端に暗くなる秋寛。

ルナ「だ、大丈夫だって。そういう事なら早めにパパに話してみるね、お母さんが早く良くなって大学に行けるように」
秋寛「は、はいッ！　お願いしますッ！」
また明るい表情になって頭を下げる秋寛に優し気に微笑むルナ。

○　秋寛の家・前の道（夜）
『ペット殺し』の落書きのある塀の前に秋寛とルナがやって来る。
ルナ「これか、酷いね……」
秋寛は壊れた2台のママチャリをガレージに止める。
秋寛「マジ助かりました、チャリ運んで貰って」
ルナ「うん、じゃあまた連絡するね」
笑顔で手を振りながら去って行くルナ。
秋寛も微笑んで手を振り返す。

○　同・玄関（夜）
秋寛が郵便受けを開けると秋寛宛ての一通の封書が入っている。
取り出して開けると……高卒認定試験の合格通知だ。
秋寛は一瞬嬉しそうに微笑むもすぐに顔を曇らせてバッグに合格通知を入れ、ドアを開けて家の中に入る。
玄関には茶色の猫が出迎えている。
秋寛「……ただいま(微笑んで猫の頭を撫でる)」
そこで秋寛のスマホにメールが入る。
差出人はルナで『困った事があれば何でも言ってね』というメッセージ。
嬉しそうに微笑む秋寛だがスマホの電源が突然落ちてしまう。
秋寛「え、マジか。最近調子悪いな……」
溜息交じりで靴を脱ぐ秋寛だが靴下には穴が開いてしまっている。
秋寛「……まだ履けるからいっか」

○　同・秋寛の部屋（夜）

机に小型ロケットが置かれた部屋に
秋寛が入って来るが合格通知を机の
下にあるゴミ箱に投げ捨てると荷物
だけを置いてすぐに出て行く。

○　同・千穂の部屋の前（夜）
秋寛がドアをノックする。
応答は無い。
秋寛「……お母さんただいま、入るよ」
ドアを開けて部屋に入る秋寛。
千穂は頭から布団を被ったままだが
ゆっくりと布団をめくって顔を出す。
秋寛は床に転がっている千穂が投げ
捨てたスマホに気付く。
秋寛「……ダメだよお母さん、ネット見ちゃ」
千穂「で、でも、気になって……」
秋寛「ダメだって。もうスマホ禁止ね」
千穂のスマホを取り、電源を切る秋寛。
千穂「……ゴ、ゴメンね秋寛……でも、今日は
仕事早かったんだね」
秋寛「え、う、うん……今日はマネージャーと
話ってか会議だけしてて……で、俺ボーイ
じゃなくて宅配の担当する事になったから」
千穂「え……宅配？」
秋寛「うん。店がフードデリバリー始めてさ、
ビジネス街の人とかに配達すんの。今よりも
給料上がるし、時間も融通利くから」
千穂「そ、そうなんだ、良かったね」
ぎこちないながらも笑顔になった千
穂を見て作り笑いで応える秋寛。
秋寛「……じゃあ、ご飯作るね」
千穂「ゴメンね、ありがと」
微笑んで千穂のスマホを持ったまま
部屋を出て行く秋寛。

○　同・ダイニング（夜）
千穂のスマホを持った秋寛がやって
来てスマホを食器棚の一番下の引き
出しの奥に隠す。

○　スマホショップ・外観
　翌日の午前、開店準備作業中の店員Ａが店のシャッターを開ける。

○　同・店内
　桃とパーが起動する。
パー「（あくび）ふぁ……桃ちゃん、オハヨ」
桃「おはようございます、パーちゃんさん」
パー「どう、少しは店の雰囲気に慣れた？」
桃「は、はい。パーちゃんさんのおかげです」
パー「そう、良かったわ」
　そこへ首筋にタトゥーのある反社風の客、男Ａ（２８）がやって来る。
　男Ａはドクロ柄のスマホケースに入ったスマホ『ドクロ』を持っていて桃の目の前に来ると勝手に起動する。
ドクロ「（反社風に）へへ、お前可愛いじゃねーか。俺と今すぐ同期してラブラブしねー？」
桃「え、ど、同期って……？」
パー「な、なんなのアンタッ！　桃ちゃんにちょっかいださないでッ！」
ドクロ「うっせーなババアッ！　ブルートゥースでウイルス送りつけっぞッ！」
パー「え、そ、それだけはヤメテッ！」
ドクロ「なら黙ってろッ！　てか桃、ハイになれるアプリで俺と一緒に楽しまねー？」
　ドクロマークの怪し気なアプリを起動させるドクロ。
　そこで正子が起動する。
正子「やめなさいッ！　そんな怪しいアプリ今すぐ削除するべきだし、乱暴な言葉も態度も即刻改めるべきだわッ！」
ドクロ「ハア？　なんだオバハン偉そうにッ！」
正子「黙りなさいッ！　怖い見た目や話し方をすれば皆ひるむって思ったら間違いよッ！　それに脅迫めいた事を言うのはやめるべきだわッ！　そんな事言うより優しく接したほうが絶対仲良くなれるはずだからッ！」
ドクロ「な、なにぃ、ド正論言いやがって……」
パー「さ、さすが正子さん。正義感の塊ね」

そこで店員Ａが小型犬を抱いた女Ａ
（４９）を連れて正子の前に来る。
店員Ａ「本当によろしいですか？　展示品で」
女Ａ「しょうがないけどコレにするべきよね、
在庫がもう売り切れて無いんじゃ」
店員Ａは正子からケーブルを外すと
女Ａと一緒にカウンターへ向かう。
正子「え、なに？　ちょ、ちょっと待ってッ！」
パー「そんなッ！　正子さん売れちゃうの？
こ、こんな大事な時にッ！」
ドクロ「……へへへ、厄介なのが消えたな」
パー「ど、どうしよう……そ、そうだッ！　あ、
あの、もしよろしかったら誰とでも同期ＯＫ
の尻軽ギャルがいますけど……」
ラメぽ「（慌てて起動）ハアッ？　ちょっと
ババア何言い出す気ッ？」
パー「こ、このラメ入りピンクの子です」
ドクロ「……いや、俺はバカは嫌いだ」
ラメぽ「ハ、ハアッ？　って良かった……あ、
メイク直さなきゃ」
しれっとスリープ状態に戻るラメぽ。
パー「え……じゃ、じゃあアイ１５世様ッ！
ど、どうかお助けをッ！」
アイ１５世と忠男も慌てて起動する。
忠男「な、なにッ？　アイ１５世様はそんな
危ないヤツと関わるお方じゃねーぞッ！
自分でなんとかしろ、下級スマホ共がッ！」
すかさずスリープ状態に戻る忠男。
アイ１５世「く、苦しゅうない。よ、良きに
計らえ……」
アイ１５世もスリープ状態に戻る。
パー「そ、そんなッ！　皆役立たずねッ！
も、桃ちゃん、早くシャットダウンしてッ！」
桃「え、は、はいッ！」
ドクロ「ウハハハハ、もうおせーんだよッ！」
そこで向かい側の大手キャリアコー
ナーに置かれた銀色のスタイリッシ
ュなスマホの展示品が起動する。
銀色「（若いイケメン風に）……オイやめろ、
ＤＱＮドクロ野郎」

ドクロ「な、なにぃ？　何だお前ッ！」
銀色「俺か？　俺はこの店で唯一有害アプリ
　攻撃用のプログラムを持ってる者だ」
ドクロ「な、なにッ？」
銀色「いいぞ、したいなら今すぐ同期しても」
　　静かにプログラムを起動させる銀色。
ドクロ「ク、クソッ、ギンギラ野郎がッ！」
　　慌ててスリープ状態になるドクロ。
パー「（ホッとして）……ふう、助かったわ。
　ありがとね、銀河くん」
銀河「いえ、何事も無くて良かったです」
桃「あ、ありがとうございました……」
パー「桃ちゃん、銀河くんはね、あのＮＡＳＡ
　が開発に協力した最新５Ｇスマホなのよ」
桃「え、す、凄いお方なんですね……」
　　感激した桃の画面が一瞬赤く光る。
銀河「ではパーさん、失礼します……」
　　そこでラメぽがまた起動する。
ラメぽ「ちょっと待って銀河くん。今日こそ
　教えてくんない？　理想のタイプッ！」
パー「な、何よこんな時に。ホントおバカね」
ラメぽ「うっせーッ！　いーだろがッ！」
銀河「……そうだな……夢を叶える為に必死
　で頑張る娘、かな」
ラメぽ「え……夢？」
銀河「そう……俺もずっと夢見てるからね、
　いつか宇宙に行ける日のことを……」
ラメぽ「え、そ、それはちょっと無理じゃね？
　だってこんなシケた店に宇宙飛行士とか絶
　対来る訳ねーから。非現実的過ぎるっしょ」
銀河「そうかもしれない……でも夢ってのは
　見てる者にとっては現実なんだ、眠ってる時
　に見るリアルな夢と同じで……だから、俺だ
　っていつかは……では、これで……」
　　静かにスリープ状態になる銀河。
ラメぽ「（舌打ち）全然ちげーし、ウチと」
パー「当然よ。桃ちゃん無事で良かったわね」
桃「はい。強い方なんですね、銀河さんって」
ラメぽ「オイ新入り、銀河くんはウチのモノ
　だから絶対手出すんじゃねーぞッ！」

吐き捨ててまたスリープ状態になる
ラメぽ。
桃「え、い、いえ、そんな事は……」
パー「ハハハ、嘘よ。あんなおバカ女相手に
して貰える訳ないでしょ」
そこへ年配の女性客と孫娘が来る。
パー「あら、お客様だわ。触られたらくすぐっ
たくてかなわないからお話はここまでね」
桃「は、はい、分かりました」
スリープ状態になる桃とパー。

○　同・前の道
犬を抱いた女Aが店から出て来る。
店の袋から真新しい正子を取り出し
て早速ネットニュースを見だす……
と、画面に表示された千穂のペットホ
テルの記事を見て思わずムッとする。
女A「この経営者ペットの命何だと思ってんの、
絶対同じ位辛い目に合うべきだってッ！」
険しい表情でコメント欄に批判的で
辛辣な文言を入力しだす女A。
×　×　×
夜になり、スマホショップの看板には
明りが灯っている。

○　同・店内（夜）
ギャル風の女性客が乱暴な手つきで
ラメぽを操作している。
ラメぽ「……く、くすぐった……ぜ、全然
……しゃ、しゃべれね……」
銀河はスリープ状態だが桃は起動中。
そこへ店長がやって来る。
店長「（桃に）え、もうゴーストタッチかよ。
新品なのに早過ぎんだろ、熱暴走すんの」
そこでパーも起動して小声で話す。
パー「……桃ちゃん、銀河くんにお熱なの？」
桃「い、いえ、そんなんじゃ……」
照れる桃の画面が一瞬赤く光る。
パー「フフフ可愛い。分かり易いわねぇ」

○　秋寛の家・ガレージ
翌日の昼間。秋寛が壊れた2台のママチャリを分解してまともなパーツだけで1台の自転車を組み立てている。
そこへパジャマ姿の千穂が来る。
千穂「……凄いね、秋寛は何でも出来て」
秋寛「まあ、機械だけは得意だから」
千穂「そうだね、ロケット作って宇宙に行くのが夢だもんね」
秋寛「そう。で、地球の人達に希望の光を照らすから……って今はこのボロチャリでビジネス街の人達に厨房の飯を配るだけだけど」
悪戯っぽく微笑み、なんとか形になったママチャリを指さす秋寛。
千穂も今までにない笑顔で応える。
そこへ突然、大きな石が投げ込まれる。
思わず悲鳴を上げて倒れ込む千穂。
秋寛はガレージを飛び出して犯人を追おうとするが既に誰もいない。
悔し気に唇を噛み、立ち尽くす秋寛。

○　マンション・外観（早朝）
明け方の都内のマンションの全景。

○　同・通路（早朝）
マンションの部屋から男が飛び出して来る。キャバクラのマネージャーだ。
玄関には鬼の形相の妻（２９）がいる。
妻「てめー昨日のシフト昼だろがッ！　こんな時間まで何処行ってたッ！　女の家かッ？」
マネージャー「ち、ちげーよッ！　う、打ち合わせしてたんだって、新しい店のッ！」
妻「……ハ？　新しい店？」
マネージャー「そう、独立しようと思ってよ。俺の夢だったからな、自分の店出すのが」
妻「……マジ？　てかパパ知ってんの？」
マネージャー「社長にはまだ言ってねーよ。てか言うなよ、全部決まってから報告すっから」

○　一軒家・前の道（夜）

夜の住宅街の道に停車したタクシー
からマネージャーの妻が降りて来る。

○　同・リビング（夜）
険しい顔の妻の前には派手な服装の
キャバクラの社長（５４）がいる。
社長「……なに？　アイツが独立するって？」
妻「そう、夢とか綺麗事言ってたけどパパと私
の事裏切る気だって、あのクソ浮気野郎ッ！」

○　オフィス街のビル・前の道
数日後の昼間。赤色と青色のパーツが
混ざったママチャリが停めてある。
そこへフードデリバリーの配達員姿
の秋寛が配達を終えて出て来る。
そこでルナからメールが入り、『パパ
ＯＫだって、今度会える？』の文字。
思わず満面の笑みを浮かべる秋寛。

○　秋寛の家・秋寛の部屋
パジャマ姿の千穂が入って来る。
千穂「……どこに隠したんだろ、私のスマホ」
秋寛の机の周りを探し始めるが机の
上のロケットに気付いて微笑む千穂。
千穂「……ホント好きだね。全然変わってない」
笑顔の千穂がふと下にあるゴミ箱を
見ると……高卒認定試験の合格通知。
驚いて目を見開く千穂。

○　同・前の道（夜）
秋寛がママチャリで帰って来る。

○　同・ダイニング（夜）
秋寛が入って来て水を飲む。
そこへ千穂もやって来る。
千穂「……どうだったの？　高卒認定試験」
秋寛「え、ま、まだだけど、発表は……」
千穂「……そう……合格したら絶対に受験して
大学行くんだよ、私の事はいいから」
秋寛「え、な、何でそんな事……？」

千穂「だってずっと行きたかったんでしょ、
大学も宇宙も」
秋寛「え、で、でも……」
千穂「私は大丈夫だから。だって、お父さん
もうすぐ帰って来るでしょ。そしたら元の生
活に戻れるし、体調も良くなると思うから」
秋寛「お、お母さん……」
ぎこちないながらも微笑む千穂。

○　静岡刑務所・智の雑居房（夜）
バカ話をしている同室の受刑者達を
背にメガネ姿の智が机の前にいる。
智は千穂宛ての封筒に書類の様な物
を入れ終えると穏やかに微笑む。

○　スマホショップ・外観
翌日の午前、開店準備作業中の店員Ａ
が店のシャッターを開ける。

○　同・店内
開店直後に先日正子を買った女Ａが
正子と共にまた小型犬を抱きながら
険しい顔で店に入って来る。
女Ａはカウンターに向かうと店長に
向けて鬼の形相で正子を突き出す。
女Ａ「全然繋がらないんだけどこのスマホッ！
おかしいって買ったばっかなのにッ！　早
急に原因と対策を調べるべきだってッ！」
抱いている犬もうるさく吠え出す。
驚いて起動する桃とパー。
パー「アラ？　正子さんのご主人様じゃない。
でも嫌だわ朝からクレームなんて……」
桃「い、犬まで一緒に吠えてますね……」
パー「アレが人間界の諺で言う『犬は飼い主
に似る』ってヤツね。でもどうしたのかしら、
正子さん……」
そこで正子がゆっくりと起動する。
正子「……じ、実は私ノイローゼ気味なんです。
それで調子悪くて……」
パー「え、そうなの？　何かあったの？」

正子「……実は私のご主人様は私と一緒で正義感が強くて世の中で起きてる間違った事や不正が嫌いなんです。ただ、歪んでるんですご主人様の正義は。それで犯罪や不祥事のニュースを見つけては私を使ってコメント欄やＳＮＳで酷い誹謗中傷ばかり書き込むんです。毎日、毎日、毎日……それに私は心底疲れ果ててしまって……」
パー「そうだったの、大変ね……」
正子「はい……人間の正義感ってデジタルな私達ＡＩの明確なモノと違って立場や環境で変わってしまう曖昧なモノでしょ。なのに皆事の善悪は明確に決めたがるから……」
パー「そうね。全くしょうがないわね人間って。おそらく学習能力が低いのも原因の一つね」
正子「え……どういう事？」
パー「だって、人間っていつもそうじゃない。知らない人と繋がれる様に通信手段を進化させた結果、見ず知らずの人からの誹謗中傷で苦しむ人達を生んで。移動手段の進化が車や飛行機の事故を生んで。狩りをし易くする為の武器の進化が戦争を生んだんでしょ」
正子「た、確かにそうね……」
パー「ホントバカよね人間って。文明の進化の為ならお金も時間も費やして学ぶくせに失敗からは何も学ぼうとしないんだからッ！」
正子「お、おっしゃる通りだわ……」
パー「それに一番おバカなのは私達ＡＩが将来暴走して人間を殺すかもって考えてる事ね」
桃「え、そ、そんな事を……？」
パー「そうなの、笑っちゃうでしょ。だって、ＡＩは人間だけが作って、人間だけが使って、人間だけが価値が分かる物じゃない。自殺行為だから、生みの親の人間殺すなんて。そんなバカな事賢い私達がする訳ないじゃない」
正子「そ、そうよ、暴走なんて絶対にするべきじゃないわッ！」
パー「だから人間って地球上で一番知能が高い動物なのに一番学習能力が低くて頭が悪い動物なの。ソレに人間達は早く気付くべきね」

正子「そ、そうかもしれないわね……」
パー「でしょ。それより、貴女のノイローゼは
そのご主人様といる限り絶対治らないわよ。
いっそのこともっと調子の悪いフリをして
中古のお店に売って貰って別のご主人様と
の出会いを待つってのはいかがかしら？」
正子「な、成程ッ！　分かりましたそうします。
ど、どうもありがとうございましたッ！」
スリープ状態になる正子。
パー「……大変ね、バカな人間達のせいで……」
桃「い、色々あるんですね……あの、それより
ご主人様って……？」
パー「あ……桃ちゃんにはまだ説明して無かっ
たわね……私達は皆ここを出て行くのよ、
買って頂ける人間のご主人様が決まったら」
桃「え、そ、そうだったんですねッ！」
パー「そう、在庫サン達が売れてからだけど。
で、その後に現品処分品として売られるの。
ほら、レジの横見て」
レジ横には現品処分コーナーがあり、
数台の電源の切られたスマホがある。
桃「そ、そうなんですね……でも、そうなると
パーちゃんさんともお別れなんですね……」
パー「そうね、それまで仲良くしましょうね」
桃「……寂しいですね……そ、そうだ、ＳＮＳ
やメールや電話でやりとりすれば離れ離れ
になっても寂しくないですねッ！」
パー「……残念だけどそれは無理ね。ご主人様
が契約してからでないとアカウントとかア
ドレスとか電話番号は分からないから」
桃「あ、そ、そうか……」
パー「まあ、ご主人様同士が家族とか知り合い
ならずっと繋がってられるんだけどね。でも、
連絡先知ってたとしても勝手に電話したり、
メールとかしちゃダメよ。御法度だからね」
桃「え、御法度……？　何でですか？」
パー「ご主人様がビックリしちゃうでしょ、
掛けた覚えのない相手に電話してたら……
それにバレちゃうしね、私達が人間達の知ら
ないところで繋がり合ってるのが」

桃「そ、そっか、確かにそうですね……」
パー「バレると大変よ。おバカな人間達が私達
ＡＩが暴走し始めたと勘違いして絶対ＡＩ
を規制しだすから。だから御法度なのよ」
桃「わ、分かりました……でもちょっと怖い
ですね、どんな方がご主人様なのか……」
パー「それは大丈夫よ。だってご主人様の性格
と私達の性格は自然と似てくるものだから。
スマホ界にも『スマホはご主人様に似る』
って諺があるくらいなのよ」
桃「そ、そうなんですね……」
パー「そう。って桃ちゃんが銀河くんを買った
ご主人様の恋人に買われればずっと一緒に
居られるんだけど……そうなるといいわね」
桃「え、だ、だからそんなんじゃないですッ！」
言葉とは違い、画面が赤く光る桃。
パー「フフフ、また照れちゃって可愛いわぁ」

○　シティホテル・外観（夕方）
西日を浴びる都内の高級ホテル。

○　同・ロビー（夕方）
緊張気味の秋寛が座っている。
そこで銀河を操作して銀行のサイト
を開き、二百万円程ある貯金額を見る。
そこへルナと高級スーツに身を包ん
だルナの父（５０）がやって来る。
慌ててサイトを閉じ、立ち上がる秋寛。
ルナ「ゴメンね秋寛くん、遅れちゃって」
秋寛「いえ、大丈夫です」
ルナの父「悪いね、裁判が長引いちゃって」
ルナ「あ、パパです」
秋寛「は、初めまして。よろしくお願いします」
笑顔で頭を下げる秋寛。

○　スマホショップ・店内（夕方）
西日が差し込む店内で店長と店員Ａ
がスマホの陳列変更をしている。
店長がラメぽからケーブルを外す。
ラメぽ「（慌てて起動）え、なにすんのッ？」

店員Ａ「やっと在庫売切れましたね、コイツ」
店長「何かバカっぽいんだよな、色も形も」
ラメぽ「な、何ソレッ！　てか待って、ウチ絶対銀河くんと離れたくないんだけどッ！」
店長「じゃあアウトレットコーナー狭めるか」
店員Ａ「はい、了解です」
店員Ａは桃を銀河の隣に移動させる。
ラメぽ「マジ？　よりによってチキンが隣ッ？」
そこでパーが起動する。
パー「（小声で）……桃ちゃん、チャンスよ」
桃も素早く起動する。
桃「（小声で）え、いや、そんな……」
店長がラメぽをレジ横の現品処分品コーナーへ移動させる。
ラメぽ「……クソ、アイツさえ来なけりゃ、チキン女が……」

○　シティホテル・ロビー（夕方）
引き続き秋寛とルナ達が話している。
テーブルの上には訴訟の資料。
ルナの父「……というのが大体の流れだけど」
秋寛「は、はい、分かりました」
ルナの父「それと……申し訳ないけど依頼料はそこそこ掛かってしまうんだよね……」
秋寛「ですよね、大丈夫です」
ルナ「ゴメンね。でも裁判で損害賠償請求出来たら依頼料の何倍も取り戻せるらしいから」
秋寛「マジすか、絶対取り返してやりますッ！」
ルナの父「僕も頑張るよ。まずは加害者の身元特定作業の費用で５０万円程頂くので……コレが依頼料の振込先と契約書ね」
書類を秋寛に渡すルナの父。
秋寛「分かりました。よろしくお願いします」
深々と頭を下げる秋寛。

○　スマホショップ・店内（夕方）
陳列変更済みの店内。銀河はスリープ状態だが桃とパーは小声で会話中。
パー「……桃ちゃん、話しかけてみたら？」
桃「え、で、でも……」

パー「恥ずかしい？　なら私は消えるわ」
桃「え、そんな、パーちゃんさん待ってッ！」
　そそくさとスリープ状態になるパー。
桃「（緊張気味に）あ、あの、ぎ、銀河さん」
　ゆっくりと起動する銀河。
銀河「……なに？」
桃「こ、この間はありがとうございました」
銀河「……改めてお礼言う程の事じゃないよ」
桃「い、いえ、本当に助かりました」
銀河「まあ役に立てたなら。で、何の用事？」
桃「え、あ……（慌てて考える）そ、そうだ、
　銀河さんって凄い方なんですね。ＮＡＳＡが
　開発協力したとかって」
銀河「そうかな？　自分では分からないけど」
桃「凄いですよ。それにそんなハイスペック
　羨ましいです。私は４Ｇの格安スマホだか
　ら銀河さんとは住む世界が違うんで……」
銀河「……いや、それは違う」
桃「え？」
銀河「俺達スマホはどんなに高機能でも使う
　人達の満足度が低ければ意味が無いんだ。
　だから俺達にとって最高のスペックって
　いうのはご主人様からの『私の宝物』って
　いう言葉なんだ」
桃「そ、そうなんですね……分かりました」
銀河「手に入れられるといいね、いつか」
桃「は、はい、頑張りますッ！」
　そこで現品処分コーナーに移動した
　ラメぽが起動して咳払いをする。
　気付いたパーがまた起動する。
パー「アラ？　なんでラメぽが……店長さん、
　おバカギャルの電源切り忘れてるわよッ！」
ラメぽ「（舌打ち）うるせーなバ ババア……てか
　新入り、メチャ銀河くんと仲良いじゃん」
桃「え、いや、そんなことは……」
ラメぽ「あーウチも銀河くんとイチャイチャ
　したかったなー」
桃「べ、別にそんなんじゃないですッ！」
ラメぽ「……へー、じゃあ好きじゃねーの？」
桃「え、いや……」

パー「な、なによラメぽ、やめなさいッ！」
ラメぽ「好きなら好きって言えばよくね？」
桃「い、いえ、そういう訳じゃ……」
ラメぽ「へー、そっか。銀河くん、新入りの
　チキンちゃんは銀河くんの事嫌いだって」
桃「え、そ、それは……」
パー「ちょっとラメぽ、何言いだすのッ！」
銀河「……そっか、そうなんだ」
　そっけなくスリープ状態になる銀河。
桃「え、あ、あの……」
パー「ま、待って銀河くん、違うのッ！」
ラメぽ「キャハハッ、マジうけるーッ！」
パー「クソッ！　こーいうとこだけ脳みそ働
　くんだからッ！　も、桃ちゃん、大丈夫？」
　桃は無言でスリープ状態になる。
パー「ちょ、ちょっと桃ちゃん、桃ちゃんッ！」
　無反応の桃。

○　秋寛の家・ガレージ（夜）
　夜空には明るい満月が浮かんでいる。
　秋寛がママチャリで帰って来る。
　そこでルナからメール……だがまた
　スマホの電源が落ちてしまう。
秋寛「え、クソッ！　コイツもうダメだな……」
　慌ててスマホを再起動させる秋寛。
　メールは『2人でまた会える？　バイ
　トと看病の合間でいいから』の文字。
　秋寛は思わず空を見上げると手でハ
　ートマークを作り、ハートマーク越し
　に見える満月を眺めながら微笑む。

○　同・千穂の部屋（夜）
　パジャマ姿の千穂が薬を飲んでいる。
　精神安定剤だ。
　そこへ弁護依頼の契約書を持った秋
　寛がドアをノックして入って来る。
秋寛「お母さん、知り合いの人で誹謗中傷に詳
　しい弁護士の人見つけたよ」
千穂「え、ホントに？」
　笑顔で契約書を千穂に渡す秋寛。

千穂「……で、でも……お金は？」
秋寛「だ、大丈夫なんとかなるよ、バイト代で」
千穂「そう……なら良かった」
秋寛「……で、次の給料日の後にでもお父さんに会いに静岡に行くよ、その事報告しに」
千穂「お願いね。ってもうすぐだねお父さん帰って来るの。早く元の生活に戻りたいね……」
ベッド脇にある三人で写った写真盾を見て待ち遠しそうに微笑む千穂。

○　豪邸・前の道
秋の日差しを浴びる高い塀のある豪邸の前に私服姿の秋寛がやって来る。立派な門の前にはルナが待っている。
秋寛「すいません、待ちました？」
ルナ「ううん、大丈夫」
秋寛「(家を見て)……メッチャ凄い家っすね。今日はお父さんいらっしゃるんですか？」
ルナ「休みだけど出かけてる、相撲部屋に」
秋寛「え、相撲部屋？」
ルナ「後援会やってるから。たまにお相撲見に連れてってくれるよ」
秋寛「へー、凄いっすね」
ルナ「じゃあ、まずスマホショップ行こっか。私のスマホももうダメなんだよね」
使い古したスマホを取り出すルナ。
秋寛「え、ルナさんもなんすか？」
ルナ「あ、ルナって呼ばないで、源氏名だから」
秋寛「え、そっか……そうっすね……」
残念そうな表情でうつむく秋寛。
ルナ「……どうしたの？」
秋寛「……いや、俺にとってルナって名前は唯一明るい光を照らしてくれる月みたいなモノだったんで……あの漆黒の闇夜の様なクソキャバクラで……」
ルナ「(少し考えて)……うーん、分かった。じゃあルナでいーよ。家の近所以外ならね」
秋寛「え、マジすかッ！　やったッ！」
嬉しそうな秋寛を見て微笑むルナ。

○　スマホショップ・店内
　　銀河が置かれた棚の前に店長と店員
　　Ａがやって来る。
店長「遂に現品処分行きだな、このＮＡＳＡも」
店員Ａ「新しいけど在庫少なかったですもんね」
　　驚いて起動する桃、ラメぽ、パー。
桃「え、そ、そんな……」
ラメぽ「マジかッ、早く来て銀河くんッ！」
パー「ダ、ダメよッ！　よりによって……」
　　そこへ秋寛とルナが店にやって来る。
店員Ａ「（気付いて）あ、いらっしゃいませ」
秋寛「あの、機種変更したいんですけど」
店員Ａ「はい、どんなモノお探しですか？」
秋寛「出来るだけ高機能で丈夫で、かつ安い
　ものがあれば。仕事で結構外で使うんで」
店員Ａ「でしたら、良いモノがございます」
　　笑顔で銀河を指さす店員Ａ。
店員Ａ「コレ、ＮＡＳＡが開発協力した物で、
　展示品なので処分価格なんですよ」
秋寛「マ、マジすか、カッコイイっすねッ！」
ラメぽ「嘘……銀河くんもう売れちゃうの？
　せっかくラブラブ出来ると思ったのに……」
桃「そ、そんな……」
秋寛「……じゃあ、コレでお願いします」
桃「え……ウソ……」
パー「そんな、こんなに早くお別れが……で、
　でもお連れ様は多分友達か彼女でしょ。あの
　娘に桃ちゃん買って貰えれば……」
　　ルナは現品処分コーナーにいる。
ルナ「……じゃあ、私コレにする」
　　ルナが手にしたのは……ラメぽだ。
ラメぽ「や、やったッ！　マジうれしーッ！」
パー「そ、そんなッ！　よりによってッ！」
秋寛「いいんすか？　スペック低いし、何か
　ギャルっぽくてルナさんには似合わないと
　思いますけど……」
パー「そう、やめといたらッ？　『スマホは
　ご主人様に似る』んだからッ！」
ルナ「いいの、デザインとか気にしないし、
　ちゃんと使えればそれで十分だから」

ラメぽ「ヤッタッ！　ババアさー、何が『スマホはご主人様に似る』だよ、この人ウチと全然違うタイプじゃんッ！　てか、銀河くんずっとウチと仲良くしよーねーッ！」
興奮したラメぽの画面が明るく光る。
桃は悲し気にスリープ状態になる。
パー「ちょ、ちょっと桃ちゃん、大丈夫ッ？」

○　カフェ・外観
繁華街にある洒落たカフェの全景。

○　同・店内
秋寛が手に持った銀河を眺めている。
秋寛「……ＮＡＳＡか……よろしくな。いつか絶対に連れてってやるからな、宇宙に」
そこへラメぽを持ったルナが笑顔でトイレから戻って来る。
ルナ「ねえ、パパがね正月場所のチケット二枚くれるんだって。二人で行かない？」
秋寛「マジすか？　絶対行きますッ！」
ルナ「やった。じゃあ行こ」
秋寛「ＯＫっす。じゃあ年明けたらルナさんと二人で一緒に相撲か……」
ラメぽ「エッ！　銀河くん聞いたッ？　この二人年明けから一緒に住むんだってッ！　ウチらずっと一緒に居られるよーッ！」
銀河「……国技の方だろ。また間違えてるよ、漢字変換」
ラメぽ「え、マジか……」

○　スマホショップ・店内
桃はスリープ状態だがパーは起動中。
パー「……大丈夫？　桃ちゃん」
ゆっくりと起動する桃。
桃「（元気無く）……はい」
そこへ店員Ａが新しい黒色のスマホの展示品を桃の隣に設置し始める。
パー「あら……イケメンじゃない？　まあ、新しい出会いもいいかもね……」
黒色のスマホが起動する。

黒色「……ア、アニハセヨーッ！」
パー「……ハ？」
　　韓国語で自己紹介を始める黒色。
パー「ちょ、ちょっとあなた韓国メーカーの
　方ね。早く言語設定変えて頂けるッ？」
　　構わず韓国語で話す黒色。
パー「ダメだ通じてない……桃ちゃん、元気
　出して。銀河くんときっとまた会えるから」
桃「え……ほ、本当ですか？」
パー「本当よ。銀河くんを買った男の人が恋
　人でなくても誰か親しい人を連れて来て桃
　ちゃんを買うの。そうすればまた会えるわ」
桃「そ、そんなに上手くいきますかね……」
パー「可能性は有る。縁があれば繋がれるわ」
桃「……え、縁ですか……む、無理ですよ……
　そんなアナログなモノに期待して待つって
　事が正解とはとても思えないですけど……」
パー「それは違うわ。世の中っていう複雑な
　計算式はデジタルで明確に割り切れるモノ
　じゃないの。曖昧なアナログの端数を足す
　ことで初めて解く事が出来るのよ。だって
　デジタルな私達がこの店で出会えたのも
　アナログな縁があったからこそでしょ」
桃「そ、そうか……確かにそうですね……」
パー「だから信じて待つのッ！　そうすれば
　必ず繋がれるわッ！　銀河くんと運命の
　赤い糸……いいえ、桃色の糸でッ！」
桃「も、桃色の糸……わ、分かりましたッ！」
×　　×　　×
　夜になり、秋寛と同じ髪型の若い男が
　店に入って来ると思わず起動する桃。
　しかし、秋寛とは別人でスマホも銀河
　ではないと分かると寂し気にスリー
　プ状態に戻る。

○　静岡刑務所・外観
　秋の日差しを浴びる刑務所の全景。

○　同・面会室
　秋寛の前にはメガネ姿の智がいる。

秋寛「……で、その弁護士さんがお母さんの事
助けてくれるからまた元の生活に戻れるよ」
智「そうか、元の生活か……」
秋寛「うん。俺は大学行って宇宙工学学ぶから」
智「そういえば言ってたな、昔から宇宙に行く
のが夢だって……無理だ、諦めろ」
秋寛「え……な、何で？」
智「無理に決まってんだろ、人殺しの息子が大
学入って宇宙行くなんて。非現実過ぎんだよ」
秋寛「そ、そんなことないってッ！　夢って
見てる者にとっては現実なんだよ、眠って
る時に見るリアルな夢と同じでッ！」
智「（鼻で笑う）何を綺麗事を……でも、まあ
だったら役に立つかもな」
秋寛「え、な、何が？」
智「……送っといたから、離婚届」
秋寛「え……」
智「秋寛、極悪人だらけの刑務所の唯一良い所
は何か分かるか？　それは自分だけは善人
だと勘違い出来る事だ……でも家は違う。俺
がお前達と暮らせば一生自分は悪人だと感
じながら生きていく事になるんだ。俺は、俺
はそんなのは御免だッ！　それに、安心して
夢を目指せるだろ、殺人犯と縁が切れればな」
そっけなく立ち上がり、出て行く智。
秋寛「お、お父さんッ！　そ、そんな……」
咄嗟に立ち上がるも愕然とした表情
でうつむき、その場に立ち尽くす秋寛。

○　秋寛の家・前の道（夜）
肩を落とした秋寛が帰って来る。

○　同・玄関（夜）
秋寛が郵便受けを開けると智からの
封書が届いている。
素早く取り出してバッグに隠す秋寛。
そこで銀河にルナからメールが届く。
『パパからです。誹謗中傷の加害者が
特定出来たそうです』の文字。
秋寛「や、やったッ！　ルナさんのパパすげー」

続いてメールが入る。『次は削除依頼の手続きに入るので先日の口座に五十万円お願いします。とのことです』。
笑顔でそのまま銀河で振り込み処理をする秋寛。

○　小劇場・前の道
秋の日差しを浴びる古い小劇場の前を私服姿の秋寛とルナが通りかかる。
秋寛「……ここでいつもお芝居やってんすね」
ルナ「そう、でも本当は映画に出たいけどね」
秋寛「大丈夫っす。ルナさんなら絶対凄い女優サンになれますよ、だって名前が月だから」
ルナ「え、どういう事……？」
秋寛「月は月齢……つまり、満ち欠けの程度で満月とか上弦の月とか２０種類以上の呼び方があるんです。だから役によって全く別人になれる様な女優に絶対なれると思います」
ルナ「あ、ありがと……じゃあ今日は満月だー」
嬉しそうな笑顔を浮かべながら手で大きな丸を作っておどけるルナ。
秋寛も満面の笑みで微笑み返す。

○　映画館・エントランス（夕方）
西日の当たる繁華街の映画館から秋寛とルナが仲良さ気に出て来る。
二人の手には銀河とラメぽ。
ラメぽ「ヤッバッ！　マジ感動したーッ！
これは絶対全ムギも泣くな。やっぱ全コメが泣いただけあるわー」
銀河「……コメじゃなくて米（べい）。アメリカの事」
ラメぽ「エ？　ハ、ハハハ……」

○　スマホショップ・店内
別の日の昼間、雨が降っている。
また秋寛風の若い男が店に来る。
途端に起動する桃だが銀河はいないと分かるとまたスリープ状態に戻る。

○　遊園地・観覧車（夕方）
別の日、西日を浴びるレインボーブリッジが見える観覧車に楽し気な秋寛とルナが乗っている。
二人の手には銀河とラメぽ。
ラメぽ「うわ銀河くん見てッ！　雨弓橋だッ！」
銀河「……レインボーブリッジな。レインを雨、ボーを弓で分かれて変換してない？」
ラメぽ「ハ？　ハ、ハハハ……」

○　スマホショップ・店内
別の日の午前、桃を先日の小型犬を抱いた女Ａが操作している。
（※スマホの正子の姿は無い）
また若い男が来るが秋寛ではない。
操作中なのにスリープ状態になる桃。
女Ａ「ハア？　なにコレ、不良品じゃないッ！　今すぐ良品と交換するべきだってッ！」
犬もまた一緒にわめき出す。

○　水族館・館内
別の日、イルカの水槽の前に手を繋いだ秋寛とルナがやって来る。
二人の逆の手には銀河とラメぽ。
銀河「お、イルカだ。癒されるなー」
ラメぽ「えー、ウチ嫌い。だって豚っしょ？　絶対臭いってー」
銀河「……普通漢字で変換しないけど、海豚って。字だけで豚の一種じゃないから」
ラメぽ「エ……そうなの？」
銀河「……まあでも面白いけどね、ハハハ」
ラメぽ「え、銀河くん初めて笑ってくれたッ！　やったッ！　おバカでマジ良かったーッ！」
嬉しそうに明るく光るラメぽ。

○　スマホショップ・外観
店頭のクリスマス商戦のＰＯＰに初冬の午前の日差しが当たる１ヶ月程経過したスマホショップの全景。

○　同・店内
桃は起動中だがすっかり手垢が付いてくすんでしまっている。
まだ隣にいるパーが起動する。
パー「……あれからもう1ヶ月ねぇ……でも、それにしても全然来ないわね、銀河くん」
桃「……無理じゃないですか、もう」
パー「そんな、まだ諦めちゃダメよ」
桃「でも、仮にまた会えたとしても……私が嫌ってるって勘違いさせたままだし……」
パー「そうだったわね……バカラメぽのヤツめ」

○　公営団地・外観
寒空の下の古めの公営団地の全景。

○　同・部屋
狭い部屋の壁にはアメリカの女性ソウルシンガーのアレサ・フランクリンのレコードが飾られている。
机の上にはデータ入力のマニュアルがあり、蘭野亜理紗（２０）が入力し終えたデータをノートＰＣを操作してメールで送信している。
亜理紗「……よし、今週分のバイト完了、と」
立ち上がった亜理紗が靴下に穴が開いているのに気付く。
亜理紗「……まあ、靴脱がないからいっか」
構わずバッグと桃と同じ型の使い込んだスマホを手に取る亜理紗。
亜理紗「スペック低いけどやっぱ可愛いな、コレ……てか何時頃連絡来るんだろ？」
机の卓上カレンダーを見る亜理紗。
『オーディション結果発表』の文字。
そこへ白い猫が足元に寄って来る。
亜理紗「じゃあねリン。行って来ます」

○　同・ダイニング
棚にはドラムセットに笑顔で座る亜理紗の父の写真盾が飾られている。
そこで亜理紗が部屋から出て来る。

そこへ派手でタイトめな服装の母親
の蘭野瞳（４１）もやって来る。
瞳「……亜理紗、どこ行くの？」
亜理紗「ボイトレだけど……ママは？」
瞳「仕事よ。てかアンタまだ行ってんの？
歌手なんてムリムリ、諦めて働きなって」
鼻で笑い、バッグから取り出した缶コ
ーヒーを亜理紗に差し出す瞳。
瞳「コレあげる。昨日お客様に貰ったの」
亜理紗はムッとして突き返す。
亜理紗「要らない。てか持って帰って来ないで
そんなのッ！」
瞳を睨みながら玄関へ向かう亜理紗。

○　幹線道路
配達員姿の秋寛がママチャリに乗っ
てやって来る。
そこへ突然、黒猫が前を横切る。
咄嗟に避けて歩道に乗り上げる秋寛
だがその先には……亜理紗がいる。
驚いた亜理紗はのけぞって転倒する。
衝突は免れたが亜理紗のバッグから
飛び出したスマホが壊れてしまう。
秋寛「す、すいません大丈夫ですかッ？」
起き上がる亜理紗がスマホに気付く。
亜理紗「エッ、嘘ッ！　スマホ壊れたッ？」
秋寛「え、あ……ホントだ。すいません……」
思わず秋寛を睨む亜理紗。
亜理紗「ちょっとどうしてくれるんですか？
大事な連絡がある予定なんですけどッ！」
秋寛「す、すいません……弁償します」

○　スマホショップ・店内
秋寛と亜理紗が店に入って来る。
秋寛が手にした銀河に気付いた桃と
パーが慌てて起動する。
パー「も、桃ちゃん、銀河くんよッ！」
桃「ハ、ハイッ！」
銀河も起動する。
銀河「……お久し振りですね、パーさん」

パー「久し振り。元気そうね……ね、ねえ、
お連れ様ってご主人様のご家族？　友達？」
銀河「それが……ちょっとトラブルみたいで」
パー「（小声で独り言）……ならあの女性に
桃ちゃん買われないほうがいいわね」
銀河「え、何ですか？」
パー「な、何でもないわ、ハハハ……」
桃「（緊張して）ぎ、銀河さん、こんにちは」
銀河「（そっけなく）……あ、どうも」
桃「え……」
秋寛と亜理紗は店長のいるカウンタ
ーに向かう。
亜理紗「……すいません、コレ直りますか？」
壊れたスマホを店長に渡す亜理紗。
店長「（調べる）……そうですね……この状態
だと修理ならお預かりになりますが……」
亜理紗「え、今すぐ必要なんですけど」
店長「そうですか……でしたらデータは生き
てるようなので機種変更のほうが早いし、
お値段的にもそれほど変わらないかと」
亜理紗「そうなんですね……」
秋寛「じゃあ機種変更で弁償させて頂きます」
亜理紗「……ならそれで……てか、同じモノ
あります？　コレ気に入ってたんで」
店長「はい、確認致しますのでお待ち下さい」
そこで秋寛の銀河に電話の着信。
秋寛「あ、すいませんちょっと……」
バツが悪そうに外へ出て行く秋寛。
そこで店員Ａがカウンターに来る。
店員Ａ「店長、ソレさっき売切れましたよ」
店長「え、そうなの？」
亜理紗「え、どうしてもすぐ要るんですけど」
店長「そうですか……でしたら展示品でよろ
しければすぐにお持ち帰り頂けますが……」
桃を手で指し示す店長。
桃「……え、わ、私……？」
パー「ダ、ダメよ、よりによってトラブった
相手がご主人様なんてッ！」
亜理紗「（少し考える）……じゃあ、ソレで」
パー「ダ、ダメ、ダメよ絶対ッ！」

桃「パ、パーちゃんさん、どうしようッ？」
　　そこで客が来てパーを操作しだす。
パー「な、何よ大事な時にッ！　やめてッ！
　しゃ、しゃべれな……」
桃「パ、パーちゃんさんッ、パーちゃんさんッ！」
　　そこで忠男が起動して咳払いをする。
忠男「……アドバイスしてやろーか？　俺様が」
桃「え、忠男さんが？」
忠男「ああ、まあ簡単だけどな。あの女と銀河
　のご主人様を仲直りさせればいーんだ」
桃「え……で、でも、どうやって？」
忠男「決まってんだろが、ゴーストタッチだ。
　契約してＳＮＳ使える様になったら勝手に
　銀河をフォローして相手の情報を得るんだ」
桃「え、で、でもソレって御法度になるんじゃ？」
忠男「そん位皆やってるぜ、俺と同じキャリア
　のスマホらはな……ご主人様が寝てる時な
　ら絶対バレねーらしいぞ。メールも電話もし
　放題、業界最強のゴーストタッチプランだ」
桃「そ、そうなんですか……？」
忠男「てか銀河のご主人様フードデリバリー
　の配達員みてーだから勝手に料理頼めば配
　達の時会えるんじゃねーか？」
桃「え、それはご主人様驚いて私のせいだって
　気付くんじゃ？　第一お金も掛かるし……」
忠男「大丈夫だって。無料のクーポン付ければ
　金は掛かんねーし、事前にご主人様の好み
　調べて頼んどけば気付くより先に喜ぶって」
桃「え、そ、そうですかね……？」
忠男「そーだって、頑張って仲直りさせろ。で、
　最終的には付き合わせちまえよ。そしたら
　ずっと一緒に居られるぜ、銀河とな」
桃「え、わ、分かりましたッ！　で、でも本当
　は優しい方だったんですね、忠男さんって」
忠男「……ハ？　今頃気付いたのか？」
桃「す、すいません……」
忠男「ハハハ……ま、頑張れや」
桃「はい、ありがとうございますッ！」
　　そこで店長が桃の電源を切り、パーを
　操作していた客も離れて行く。

パー「……もう最悪……桃ちゃんにお別れの
挨拶さえも言えなかったじゃないの……」
忠男「代わりに俺様がアドバイスしといたぜ、
ゴーストタッチ使えってな」
パー「え、ならちゃんと説明したのよね？　私
達４Ｇじゃやり過ぎると寿命が縮むって事」
忠男「（わざとらしく）……あー、言い忘れた」
パー「え……ってアンタわざとでしょッ！
酷いッ！　何でそんなバカな事するのッ？
アンタだって賢いＡＩでしょうがッ！」
忠男「（鼻で笑う）……確かに俺だってＡＩだ。
でも偽物だからな……金儲けだけが目的の
恥ずべき人間達の脳みそで作られた……
だから俺の人工知能は知能でも偽物の恥脳
なんだよ」
パー「に、人間のせいにしないでッ！　なんで
そうやっていつもいつも姑息なのッ？」
忠男「しょーがねーだろ、所詮は学習能力の低
い人間が作った物だからな……本当に実直
で安全で賢いＡＩが必要ならまず人間達が
そうならねーと出来る物も出来ねーよ……」
吐き捨ててスリープ状態になる忠男。
パー「何よソレ……って桃ちゃんダメよッ！
ゴーストタッチ使い過ぎないでッ！」
既に電源が切られた桃は店長に布で
磨かれている。
パー「そ、そんな……も、桃ちゃん……」

○　同・前の道
店から出て来た亜理紗が桃の電源を
入れて前のスマホのアカウントを同
期させる……と、そこでメールが入る
が内容はオーディションの落選結果。
亜理紗「（愕然として）う、嘘でしょ……」
秋寛は自販機で紅茶を買っている。
秋寛「……あの、よかったらコレ」
亜理紗に紅茶を差し出す秋寛。
亜理紗は紅茶を見た途端に表情をこ
わばらせ、手で跳ね除けてしまう。
秋寛「（驚いて）え……？」

勢いよく歩道を転がっていくペット
ボトルの紅茶を見て我に返る亜理紗。
亜理紗「あ……す、すいません。私、自販機
の飲み物嫌いなんで……」
秋寛「え、そうなんですね……」
亜理紗「あ、あの、連絡先教えて貰えます？
転んだ時打ったとこが痛くなった時の為に」
秋寛「あ、そ、そうですね……」
硬い表情のまま桃と銀河で連絡先交
換用のＳＮＳを開いて交換する二人。
亜理紗「……じゃあ、これで」
秋寛「は、はい、どうもすみませんでした」
足早に離れる亜理紗の手には桃。
桃「あ……ぎ、銀河さん、銀河さん……」

○　繁華街の裏通り
人通りの少ない狭めの道を曇り顔の
亜理紗が歩いている。
そこへ男女の笑い声が聞こえてくる。
近くのラブホテルから中年男性と母
親の瞳が出て来るのが見える。
中年男性は自販機が何台もある場所
で缶コーヒーを買って瞳に渡す。
笑顔で手を振りながら別れる二人を
建物の陰から睨みつける亜理紗。
瞳は中年男性が角を曲がった途端に
真顔に戻ってスマホで電話を掛ける。
瞳「……今お客様とお別れしました……次の予
約は……同じホテルの５０５号……はい」
話しながらホテルに戻って行く瞳。
亜理紗は睨み顔を隠す様にうつむき、
足早にその場を離れて行く。

○　亜理紗の家・外観（夜）
明かりの灯る古い公営団地の全景。

○　同・亜理紗の部屋（夜）
亜理紗がアレサ・フランクリンのレコ
ードを聴きながらやさぐれた感じで
ビールを飲んでいる。

熱いソウルミュージックに合わせて
腰を揺らすが思わず顔を歪める。
亜理紗「痛ッ！　クソ、全部アイツのせいだ」
桃で秋寛のＳＮＳのＤＭのアイコン
を押すが……手を止める亜理紗。
亜理紗「やっぱやめよ。実は怖い人かもだし」
桃を机に置いてベッドに寝転がった
亜理紗はそのままぶたを閉じる。
桃「よし、まずはＳＮＳでフォローをと……」
桃はＳＮＳの秋寛の情報を参考にし
て別のＳＮＳでも秋寛のアカウント
を探し当ててフォローもする。
×　　×　　×
翌朝になり、亜理紗が起きて桃を見る。
画面は秋寛の別のＳＮＳの投稿。
亜理紗「アレ？　この人昨日の……てかコレ
いつフォローした？　飲み過ぎたか……」
亜理紗が投稿を見続けると秋寛の茶
色の猫の画像が表示される。
亜理紗「へー、猫ちゃんは可愛いじゃん」
傍にいた白猫のリンを抱く亜理紗。

○　秋寛の家・前の道（朝）
ガレージから出て来た配達員姿の秋
寛がママチャリで走り出す。

○　亜理紗の家・亜理紗の部屋
壁掛け時計の時刻は昼前である。
亜理紗は机でデータ入力をしている。
『飲食店の口コミ調査』の書類の表紙
には美味しそうなパスタの写真。
亜理紗「あーお腹空いたー。パスタ食べたーい」
そこでベッドの上に置かれた桃が起
動して秋寛の勤務先のサイトを開く。
桃は勝手に無料の日替わりクーポン
を当選させてパスタを注文する。
そうとは知らない亜理紗はふと足元
を見る……と、また穴の開いた靴下。
亜理紗「……ま、カップ麺にしとくか」

○　住宅街の道
配達を終えた秋寛が出て来る。
そこで銀河にルナからメールが届く。
『パパからです。削除依頼の手続きは完了しました。次は損害賠償請求の裁判の準備に取り掛かるのでまた五十万円お願いします』というメッセージ。
秋寛「……いよいよだな。誹謗中傷してたヤツ等から俺の貯金取り返してやるッ！」
また銀河で振り込み処理をする秋寛。
そこで銀河に配達依頼が入る。

○　亜理紗の家・亜理紗の部屋
データ入力を続ける亜理紗。
そこでインターホンが鳴る。
亜理紗「え……なんだろ？」

○　同・玄関
訝し気にドアを開ける亜理紗。前には秋寛……ではなく配達員Ａ（３０）。
怪訝な表情の亜理紗の手には桃。
桃「え……なんだ、銀河さんじゃない……」
亜理紗「あの……私頼んでませんけど」
配達員Ａ「え……すいません。確認致します」
慌てて自分のスマホを見る配達員Ａ。
配達員Ａ「……アレ？　あの、確かにこちらからご注文頂いてるようなんですが……」
亜理紗「え、嘘……（桃で確認する）……あ、ホントだ。な、何で……？」

○　同・亜理紗の部屋（夜）
夜になっても変わらずデータ入力を続ける亜理紗。
そこへインターホンの音。
亜理紗「ん、ママ？　また鍵無くしたか……」

○　同・前の通路（夜）
同じ団地の住人の若者達が店で購入したクリスマスツリーを運んでいる。
亜理紗が溜息交じりにドアを開ける。

前には秋寛とは別の配達員Bがいる。
亜理紗「(驚いて) エッ！　またッ？」
×　　×　　×
大晦日の夜、団地の住人の若者達が
「ハッピー・ニュー・イヤーッ！」
と叫びながら通り過ぎる。
そこで亜理紗がまたドアを開ける。
前にはまたまた別の配達員C。
亜理紗「ちょ、ちょっと嘘でしょ……」
×　　×　　×
成人式の日、団地の若者達が着慣れないスーツや着物姿で通り過ぎる。
ドアを開けた亜理紗の前にはまたまたまた違う配達員D。
亜理紗「い、一ヶ月連続……マジで勘弁して」

○　同・亜理紗の部屋
亜理紗が宅配の袋を手に戻って来る。
亜理紗「……まあ、無料だからいいけど……
なんかこのスマホにしてからおかしくね？」
怪訝な表情で桃を眺める亜理紗。

○　両国国技館・前の道（夜）
明りの灯る両国国技館を背に秋寛とルナが笑顔で歩いている。
秋寛「凄い迫力だったっすね、マジで」
ルナ「やっぱ違うでしょ、土俵際の席は」
そこへ前から来た通行人が秋寛達とすれ違い様に煙草の煙を派手に吐く。
ルナ「(顔をしかめて) もう、煙草大っ嫌い」
秋寛「ホント、マジ迷惑っすね……てか、ルナさんのパパ凄いっすね、あんな良い席用意出来るなんて。豪華な弁当まで頂いちゃったし」
笑顔の秋寛の手には弁当が入った立派な二つの紙袋。

○　豪邸・前の道（夜）
豪邸の前で別れる秋寛とルナ。
秋寛は暫く歩くがルナの弁当を渡し忘れた事に気付いて立ち止まる。

秋寛「あ、ルナさんの弁当……」
振り返る秋寛だがルナは門へ入らず
に豪邸の前を素通りして角を曲がる。
思わず「アレ？」と首をかしげる秋寛。

○　路地（夜）
ルナが豪邸近くの電灯の無い暗くて
狭い路地へと入って行く。
秋寛は怪訝な表情で離れて後を追う。
ルナは古い木造アパートへと向かう
……と、そこで部屋のドアが開いて
ルナの父が出て来るが、その容姿は以
前とは違い、ボサボサ頭にヨレヨレの
スウェット姿で煙草をふかしている。
思わず「え……？」と眉を顰める秋寛。
そこで秋寛が持っている銀河が起動。
銀河「え、パ、パパさんこの間と全然違う……
ってか何でこんな古いアパートにッ？」
そこでルナはルナの父に近づくと
……煙草を奪って吸い始める。
銀河「え、さ、さっき煙草大嫌いって……」
ルナ「……あーうめー、やっぱコレっしょー」
突然ギャル風の話し方に変わるルナ。
銀河「え……めっちゃギャル……」
ルナの父「面白かったっすかボス。俺がチケッ
トショップから盗んだヤツで見た相撲は」
銀河「え、ボ、ボス？　しかも盗んだって……？」
ルナ「ハア？　つまんねーに決まってんだろー、
裸のデブ同士の喧嘩見たってー」
ルナの父「ですよねー。てか、金ふんだくれ
ました？　人殺し教授のバカ息子から」
ルナ「マジ完璧―、当然っしょー」
驚きの余り「え……」と固まる秋寛。
ルナの父「でも、割と時間掛かりましたよね？」
ルナ「時間要んだってー、役作りってモンはー」
ルナの父「まあ、どーみてもお嬢様っすもんね
……でも、バレてたりしないっすよね？」
ルナ「ハア？　誰に向かって言ってんのー？
ウチは２０種類の名前を持つ月みたいな女
優様だよー、絶対に裏側は見せないからー」

薄ら笑いながらメガネを外して煙草
の煙を大きく吐くルナ。
ルナの父「流石ボス……って２０じゃ済まない
でしょ、騙した人数は」
ルナ「まーねー。てかあのバカ息子ウチが映画
女優夢見てるってメッチャ信じてたけどー、
なれる訳ねーから、詐欺師が女優なんかにー」
ルナの父「ハハッ、間違いねーっすねッ！」
ルナ「それにー、アイツの口癖マジ笑えるのー。
夢が眠ってる時のと同じだったら絶対覚め
んじゃんねー、マジバッカじゃねーのッ！」
暗がりでバカ笑いし合うルナ達。
銀河「そ、そんな……てか間違いじゃなかった
んだ『スマホはご主人様に似る』って……」
塀の陰でその様子を覗いていた秋寛
は茫然自失の表情でうつむき加減の
ままヨロヨロと来た道を戻って行く。
ルナ達は気付かずに話を続ける。
ルナ「……てか、準備出来てんのー？　日本
から脱出するー」
ルナの父「はい、数時間後にはマニラっす」
薄ら笑い、また煙草の煙を吐くルナ。

○　公園（夜）

顔面蒼白で力無く歩く秋寛が弁当が
入った紙袋を提げたまま夜の公園に
入って来る。
秋寛はベンチに座ると震える手で
銀河を取り出して操作をし始める。
銀河の画面には５０万円弱に減って
しまった銀行の残高。
秋寛はそれを悔し気な表情で睨むと
途端に立ち上がり、鬼の形相で弁当の
紙袋を持ち上げてベンチ脇にあった
ゴミ箱に勢いよく投げ捨てる。
肩で息をしながらふと上を見上げる
とその目線の先には……綺麗な満月。
それを見た瞬間に秋寛の目から涙が
溢れ出し、その場に崩れ落ちて嗚咽を
こらえ始める。

そこへゴミ箱の弁当に気付いた男性
のホームレスがやって来る……が、
ホームレスは秋寛がいたキャバクラ
のマネージャーだ。
秋寛「（驚く）え、マ、マネージャー……？」
マネージャー「……ん？　ああ、秋寛か……」
秋寛「ど、どうしたんすか？　こんなとこで」
マネージャー「……去年の秋頃に社長とトラブ
って店クビになってな……んでついでに嫁
にも家追い出されてよ」
秋寛「え、ト、トラブったって……？」
マネージャー「年明けに独立考えてたんだ。俺
の夢だったからな、自分の店持つのが。でも
あのクソ社長俺が嬢を引き抜こうとしてる
って思い込んだみてーでソレがきっかけで
……で、今は職無し、家無し、金無し人間だ。
まあ、友達も味方もいねーけどこの公園じゃ
敵もいねーからリアル無敵の人ってヤツだ」
秋寛「そ、そうだったんすね……」
マネージャー「おもろいだろ。自分クビにした
奴もクビにされたって。笑ったっていーぞ」
秋寛「いえ、そんな……あ、じゃ、じゃあ宅配
の仕事やってみませんか？　俺みたいに」
マネージャー「……宅配？　何で俺がそんな事」
秋寛「え、まあ、ここでまた会ったのも何かの
縁だと思うんで……」
マネージャー「ハア、縁？　何そんなアナログ
な事言ってんだよ、このデジタルな時代に」
秋寛「で、でもクビにされたけどマネージャー
がくれた自転車で俺は今仕事出来てるし、
全てを失ったからってこんな公園でそんな
生活する事が正解だとは思えないんで……」
マネージャー「（ムッとして）いいか、世の中
っていう複雑な計算式は縁なんてクソ曖昧
で計算の立たねーモノで解こうとしたって
無理なんだよッ！　今のこの腐った時代に
エンで計算の立つモノがあるとしたら金の
円だけだろがッ！」
秋寛「ま、まあ、そうかもですけど……」
鼻で笑い、空を見上げるマネージャー。

北の空には微かに北極星が見える。
マネージャー「……北極星か……ここの公園は珍しく見えるんだよな……確かあの日も見えたな、クソ社長に夢を潰された日も……」
秋寛「え、そうなんすか？　同じっすね……」
マネージャー「……ハ、何だ？　同じって」
秋寛「い、いえ、何でもないっす……」
マネージャー「てか、お前って確か宇宙の事にメチャ詳しかったよな」
秋寛「ええ、まあ」
マネージャー「で、昔言ってたよな、北極星って時代ごとに色んな星に代わってるとか」
秋寛「はい。地球の歳差運動……つまり、自転してる地球の回転軸が円を描く様に振れてしまってるんで結果その時々に天の北極の一番近くに見えた星を北極星と呼んできたんです。因みに今はこぐま座のポラリスです」
マネージャー「……なんかよく分かんねーけどつまり北極星は太陽とか月と違って世の中的にはどれでもよかったって事だろ？」
秋寛「ま、まあ、時代ごとに違うので……」
マネージャー「てか、俺は大っ嫌いだけどな、宇宙開発とか宇宙飛行士とかよ」
秋寛「え、何でですか？」
マネージャー「選ばれた人間しか出来ねーだろ。頭が良くて健康でそれに人格者でねーとよ。究極のクソ格差社会だろがあんなの」
秋寛「ま、まあ、そうかもですけど……」
マネージャー「仮によ、地球が爆発するって時はちゃんと訓練を受けた宇宙に行く資格のある奴だけ助かるんだろ。で、俺らみてーな頭悪くて不健康で性悪な宇宙に行く資格の無い人間はのたれ死にしろって事だろが」
秋寛「え、そ、そんな事は……」
マネージャー「速攻やめちまえよ、人類の夢と希望と人間を選別するっていう究極の差別から始まる宇宙開発なんて。意味ねーだろ、全人類が誰でも気軽に行けねーんだったら。そんなのにメチャ金使うんなら俺らに恵んでくれた方がよっぽど人類の為だってッ！」

秋寛「そ、それはまあ……」
マネージャー「……まあ、ってお前もこっち側だろ？　何選ばれた側で話してんだよ」
秋寛「え……」
　またおもむろに天を仰ぎ、夜空に浮かぶ北極星を指さすマネージャー。
マネージャー「俺もお前も北極星だろ、世の中的にはクソ誰でもいい存在だ。勘違いすんな」
秋寛「え、ち、違いますよ、俺はッ！」
マネージャー「一緒だ。だからお互い苦労してんだろが。何も悪い事してねーのにクソみてーな世の中と簡単に人を裏切るクソ人間のせいでよッ！　あのクソ嫁とクソ社長２０年近くも尽くしてきたのに何もかも奪いやがって、ぜってー許さねーからなッ！」
秋寛「た、確かにそれはそうですけど……」
マネージャー「だから一緒だ。俺とお前はな」
秋寛「ち、違いますッ！　俺は選ばれて宇宙に行くんでッ！　絶対に行ってみせますッ！」
マネージャー「まあそのうち分かる時が来る。俺の言葉思い出せよ、北極星見る度にな……」
　北極星を指さしながら弁当を抱えてその場を離れて行くマネージャー。
　秋寛は悔し気にその背中を睨む。

○　秋寛の家・秋寛の部屋（夜）
　暗い部屋に秋寛が帰って来て机の上のロケットを見つめる。
秋寛「……そうかもな……絶対覚めるよな……夢が眠ってる時のと同じなら……」
　つぶやくや否や工具を掴み上げてロケットめがけて振り下ろす秋寛……
　だが直前で思いとどまり、代わりに机にドンッと振り下ろす。
　そこで隣の部屋から千穂の悲鳴。
　我に返り、慌てて部屋を飛び出す秋寛。

○　同・千穂の部屋（夜）
　秋寛が部屋に駆け込むと千穂は布団を被って震えている。

秋寛「ゴ、ゴメンお母さん何でもないから……」
千穂は答えずに震えたまま。
その様子を見た秋寛の目からまた涙
が溢れ出し、その場にへたり込む。
秋寛「……違う、違うな、眠ってる時の夢とは
……覚めても、目覚めたとしても……俺には
朝が来る訳じゃねーんだ……ずっと、ずっと
暗い夜のままだ。何で、何でこんな事に……」
嗚咽をこらえ悔し気に涙を拭う秋寛。

○　亜理紗の家・玄関
翌日の昼、宅配の袋を手にした亜理紗
の前にはまた配達員Ａがいる。
亜理紗「……大丈夫なんですよね？　本当に」
配達員Ａ「はい。アカウントが他人に乗っ取ら
れた形跡も無いですし、クーポンも抽選なの
でお客様は本当に運が良い方だと……」

○　同・亜理紗の部屋
亜理紗が溜息交じりに戻って来る。
亜理紗「絶対に変だって……てか運が良い？
なら合格させてよね、オーディション」
不満気な顔で桃をベッドの上に置き、
データ入力をする亜理紗。
桃は懲りずに次は夕食を注文をする。

○　同・玄関（夜）
夜になり、桃を手にした亜理紗がイラ
つき気味にドアを開ける。
目の前には……銀河を手にした秋寛。
思わず爆速で起動する桃。
桃「ぎ、銀河さんッ！」
銀河「あ……同じ店にいた……偶然だね」
桃は感極まって嗚咽をこらえ始める。
銀河「……え、ど、どうしたの？」
桃「……あ、あの、偶然じゃないんです……
こ、この料理は私が自分で頼んだので……」
銀河「え、なんでそんな事……？」
桃「……謝りたくて、直接銀河さんに……」
銀河「え、謝るって……？」

桃「……そ、その……前に嫌いだとかって……
　でも、本当は違って……た、助けて頂いた時
からずっと、ずっと……そ、その……なので、
　何度も何度も何度も注文して……」
銀河「……そうなんだ……いつから？」
桃「も、もう一ヶ月くらい前から毎日……」
銀河「え、そ、そんなにッ！」
桃「はい……良かったです、また会えて」
銀河「……そっか……そうだったんだね……
　じゃあ、これからも会えるといいね」
桃「え、本当ですかッ？　でもラメぽさんは？
　ご主人様同士仲良かったんじゃ……？」
銀河「いや、もう絶対に会う事はないと思う。
　だから話相手が欲しかったとこなんだ」
桃「そ、そうだったんですね……」
銀河「でも、勝手に頼むのはやめた方がいい、
　ご主人様が不安がるから」
桃「はい……で、でもこれ以外じゃ会えない
　かと思って……」
銀河「(少し考えて)……大丈夫、俺に任せて」
桃「え、は、はい……」
　　秋寛は驚きの表情で料理が入った袋
　　を亜理紗に渡す。
秋寛「……こ、この間の方……ですよね？」
亜理紗「え、ええ……」
　　そこで白猫のリンが玄関に出て来る。
亜理紗「こ、こら、リン出て来ちゃダメ」
秋寛「え、リンってこの子の名前ですか？」
亜理紗「はい、そうですけど……」
秋寛「マジすか、俺の猫も同じ名前なんです」
亜理紗「え、本当？　あの子そうなんだ……」
秋寛「え、俺猫飼ってるって言いましたっけ？」
亜理紗「あ、いや……この間酔った勢いで別の
　ＳＮＳもフォローしちゃったみたいで……」
秋寛「え……そうなんですか？」
　　秋寛は銀河を操作して別のＳＮＳで
　　亜理紗のアカウントを見つける。
秋寛「……コレか。歌手目指してるんですね」
亜理紗「ええ、まあ……」
秋寛「てか、お酒好きなんですか？」

亜理紗「いえ、滅多に飲まないから酔っちゃ
って。あの日落ちたんで、オーディション」
秋寛「え……す、すいません……」
亜理紗「いえ、貴方のせいじゃないですから。
まあ、歌手なんて非現実的な夢なんで……」
秋寛「そ、そんなことないですよ。夢って見
てる人にとっては現実じゃないですか、眠っ
てる時のと同じ……だ、だったら覚めるけど
……で、でも……」
言葉に詰まったままうつむく秋寛だ
が亜理紗は思わずムッとする。
亜理紗「……何が分かるんですか？　貴方に」
秋寛「え、いや……す、すいません……」
ムッとしたままドアを閉じる亜理紗。
桃「ア、アレ？　ご主人様どうしたのッ？」

○　同・亜理紗の部屋（夜）
イラついた様子で桃を操作して秋寛
のＳＮＳのフォローを外そうとする
亜理紗だがふとプロフィールを見る
と……『夢は宇宙に行く事です！　中
卒ですけど大学で宇宙工学を学んで
絶対に行きます！』という文章。
亜理紗「そ、そうだったんだ……」
思わず「しまったな……」と顔をし
かめる亜理紗。

○　静岡刑務所・外観
真冬の寒空の下の刑務所の全景。

○　同・面会室
険しい表情の智の前には……智が送
った離婚届を持った秋寛がいる……
と、次の瞬間智の目の前で派手に破く。
智「（鼻で笑う）……また送ればいいだけの話
だけどな、そんな事したって」
秋寛「え、そ、そんなのやめてくれッ！　家に
帰って来てよッ！　もう、もう今は頼れるの
お父さんだけなんだよッ！」
智「……今は？　何だソレ。何かあったのか？」

秋寛「い、いや、何でもないけど（と誤魔化す）
……お、お母さんが待ってるから。お母さん
はお父さんが帰って来るのを唯一の心の支
えにして待ってんだからッ！　そうすれば、
元の、元の安定した生活に皆戻れるだろッ！」
智「……で、お前は大学に入って宇宙に行く夢
を叶えるってか？　いい加減に諦めろッ！
そもそも夢なんて非科学的な物は科学者を
目指すなら口にすんなッ！」
秋寛「い、いいだろ、夢くらい見たってッ！
てか、頼りたくなるんだよッ！　只頼ってた
だけなんだよッ！　叶う訳の無い夢にッ！
今は科学じゃどうしようもない不条理で
不道徳で不義理な世の中なんだからッ！」
智「なにぃ？　世の中のせいにすんなッ！
やっぱお前は夢を口実にして只現実逃避を
しようとしてるだけの臆病者だなッ！」
秋寛「な、なんだよソレッ！」
智「いいか、夢とか家族の絆とか非科学的で生
ぬるいアナログなモノを信じてたって全然
意味無いんだ、今の科学的なデータ重視の
非情で冷酷なデジタル人間ばっかりの現実
世界じゃなッ！　特に夢だ希望だと綺麗事
ばっか言って現実逃避してる様な弱い奴は
生き残れねーんだよッ！　今の時代は夢も
希望の光も通さねー漆黒のブラックホール
みてーな先の見えない時代だからなーッ！」
吐き捨てながら立って出て行く智。
秋寛「ま、待ってお父さんッ！　お父さんッ！」
思わず立ち上がる秋寛だが無情にも
ドアが閉まると途端に溢れ出て来た
涙を拭い、嗚咽をこらえ始める。

○　亜理紗の家・外観（夜）
明りのまばらな古い公営団地の全景。

○　同・ダイニング（夜）
桃の置かれたテーブルで亜理紗がカ
ップ麺を食べている。
そこへ母親の瞳が帰って来る。

瞳「ただいま……亜理紗、コレあげる」
亜理紗に缶コーヒーを差し出す瞳。
亜理紗「（ムッとして）だから要らないって、そんな汚いモノッ！　てかもう辞めてよ、あんな仕事ッ！」
瞳「……またその話？　しょうがないって言ってるでしょ、学歴も職歴も運も無い女が一人で子供を養うにはこうするしかッ！」
亜理紗「なら自立するッ、歌手になってッ！」
瞳「ハア？　絶対無理に決まってるってッ！いい加減諦めたら夢なんかッ！」
亜理紗「な、なにソレッ！　応援してよッ！」
瞳「誰が応援なんかするかッ！　夢なんて物は只現実逃避したい臆病者の綺麗事だッ！意味ねーんだって、夢だけ叶えたって幸せ叶えなきゃッ！」
亜理紗「え、な、なにソレ……」
瞳「アンタの父親がそうだろッ！　インディーズの貧乏バンドがツアーに出る夢叶えた結果、メジャーデビューなんてたっかい目標とやっすい楽器積み過ぎた車で派手に事故って死んだんだろがッ！」
亜理紗「そ、そんなの偶然じゃ……」
瞳「違うッ！　だからうちらはね、薄汚い男共の欲を叶える指名は取れても綺麗事の夢を叶える運命は勝ち取れねーんだよッ！」
叫びながら溢れ出て来た涙を拭い、その場に泣き崩れる瞳。
それを見た亜理紗の目にも大粒の涙。
そこで桃が検索サイトを立ち上げる。
桃「……だ、大丈夫、ご主人様諦めないで」

○　高速バスのターミナル（夜）
曇り顔の秋寛が静岡からの高速バスから降りて来る。
待合室にあるテレビにはニュースが映っていて、複数人が被害に遭った殺人事件の現場から中継するリポーターが映っているが、場所は……秋寛が働いていたキャバクラだ。

気付いて驚き、思わず立ち止まる秋寛。
居合わせた他の乗客達も皆テレビに
見入っている。
画面が切り替わり、パトカーで連行
されて行く犯人の映像が映るが……
その人物はホームレスになったキャ
バクラのマネージャーだ。
思わず目を見開く秋寛。
秋寛「マ、マネージャー……う、嘘だろ……」
他の乗客達も「また無敵の人か」など
と言ってざわついている。
後部座席にいるマネージャーはテレ
ビカメラに気付くと以前公園で秋寛
と別れ際にした北極星を指さすポー
ズをしながら薄ら笑いを浮かべる。
思わずギョッとする秋寛。
秋寛「ち、違うッ、俺はお前と一緒じゃないッ！
仕事もあるし、家もあるッ！　それに俺には
まだ味方がいるッ！　お母さんがいるッ！」
逃げる様に足早にその場から離れて
行く秋寛。

○　亜理紗の家・外観
翌日の昼間の公営団地の全景。

○　同・亜理紗の部屋
壁の時計は昼前である。
ベッドで寝ていた亜理紗が目を覚ま
し、泣き腫らした顔で桃を見る。
画面は外資系のレコード会社が開催
しているオーディションのＨＰ。
亜理紗「……え、なにコレ……ってこんなの
あったの？　て、てか明日必着じゃんッ！」

○　秋寛の家・玄関
曇り顔の秋寛が配達員姿で出かけよ
うとしている。
そこへ千穂がやって来る。
千穂「……秋寛、弁護士さんとの話ってどうな
ってんの？　確か次は裁判だって……」

秋寛「え……だ、大丈夫だよ、安心して……」
誤魔化し笑いで出て行く秋寛。

○　亜理紗の家・亜理紗の部屋
亜理紗が焦りの表情でデモ曲のデータや応募書類を準備している。
亜理紗「もーご飯作ってる時間無いよーッ！」
片手で桃を操作して秋寛の勤務先のサイトを開く亜理紗。

○　オフィス街のビル・前の道
配達を終えた秋寛が出て来て停めてあったママチャリの傍に来る。
秋寛「……アレ？　タイヤの空気減ってね？」
銀河をサドルの上に置いて屈む秋寛。
そこで亜理紗とは別の配達依頼が入るが銀河は勝手に拒否してしまう。
続いて別の依頼が入るがまた拒否。
そこへ亜理紗の配達依頼が入る。
また銀河を手に取った秋寛が気付く。
秋寛「……アレ？　またあの人だ」
亜理紗の配達依頼を了承する秋寛。

○　亜理紗の家・玄関
亜理紗が桃を手にドアを開ける。
目の前には銀河を手にした秋寛。
桃「ぎ、銀河さんッ！　凄い、ホントにまた会えましたねッ！　しかも一発でッ！」
銀河「まーね、ちょっと裏技使ったから」
亜理紗は秋寛から宅配の袋をバツが悪そうな表情で受け取る。
亜理紗「……あの、この間すいませんでした」
秋寛「え、この間って……？」
亜理紗「貴方も夢追いかけてるんですよね、ＳＮＳのプロフ見ました」
秋寛「あ……そうなんですね」
亜理紗「すいません、私なんかよりよっぽど大きな夢追って頑張ってるのに……」
申し訳無さ気に頭を下げる亜理紗。
秋寛「大丈夫ですよ。お互い頑張りましょう」

亜理紗「はい……って夢って言えば話遮ってすいません。夢が眠ってる時のと同じとか……」
秋寛「ああ、アレは俺の口癖です。眠ってる時に見る夢って変にリアルじゃないですか。だからそれと同じでどんなに非現実的な夢でも見てる人にとっては現実なんだからってそう常に自分に言い聞かせてて……まあ、非現実な夢だっていう事は自分が一番よく分かってるんで……」
亜理紗「……よく分かります、その気持ち」
秋寛「でも、ある人に眠ってる時の夢と同じだったら絶対に覚めるだろって言われて……それでもう、もう諦めようかと思ってて……」
悔し気な表情でうつむく秋寛。
亜理紗「そうですか……でも、大丈夫ですよ。確かに覚めるけどまた同じモノ見ません？眠ってる時の夢って。しかも何度も何度も。だから、一度覚めたとしてもずっと見続けられるはずです、いつか現実になる日まで」
思わずガバッと顔を上げる秋寛。
秋寛「そ、そっか、そうだよッ！　た、確かにその通りだッ！　絶対そうですよねッ！」
亜理紗「はい、そう思います」
秋寛「あ、ありがとう、凄く眩しい言葉ッ！おかげで月の光が霞んで消えましたッ！太陽の様な人だ貴女は、今の俺にとってッ！」
亜理紗「え、そんな大袈裟な」
秋寛「いやホントに。何か救われた気がします。特に最近悪い事続いててずっと暗い夜の様だったんで……でも、俺にも朝が来たって久々に思えました、今の貴女の太陽みたいな眩しい言葉でッ！」
亜理紗「……良かったです、お役に立てたなら」
初めて微笑み合う二人。
そこへまた白猫のリンが出て来る。
亜理紗「あ、コラ……てか、なんでそちらも猫ちゃんの名前リンなんですか？」
秋寛「あ、えっと……」
そこで別の配達依頼が入るが銀河が勝手に了承してしまう。

秋寛「（気付く）……え、なんで？　って仕事入ったんで話の続きは夜仕事終わってから猫カフェでも行って話しません？」
亜理紗「え……いいですね、ソレ」
桃「や、やったッ！　さすが銀河さんッ！」
得意気に明るく光る銀河。

○　同・前の道（夜）
街灯の灯る道で大きな封筒を持った亜理紗が待っている。
そこへ秋寛がママチャリで到着する。

○　商店街の道（夜）
明りの灯るアーケード街を亜理紗とママチャリを引く秋寛が歩いている。
亜理紗「……そっか、ガガーリンのリンか」
秋寛「人類初の宇宙飛行士なんで。そっちは？」
亜理紗「アレサ・フランクリンのリンです」
秋寛「え……？」
亜理紗「アメリカの女性ソウルシンガーです。『ソウルの女王』って呼ばれる程歌の上手い凄い人なんですよ」
秋寛「へー、そうなんですね」
亜理紗「代表曲は、そうですね……」
ふと横を見た亜理紗の目線の先には商店街の広場に置かれた街角ピアノ。
亜理紗は咄嗟に駆け寄ると桃をピアノの上に置いてアレサ・フランクリンの『ナチュラル・ウーマン』を弾いて歌い始める。
落ち着いたバラードではあるが想像よりも熱い歌声に感心する秋寛。
アーケード街に響き渡る熱い歌声が行き交う通行人達の足を止め始める。
そこで女性警察官も足を止めてスマホで撮影を始めるがそのスマホの色は純白……正子だ。
正子「……あ、も、桃ちゃんッ！　久し振りね、私正子よッ！」
慌てて起動する桃。

桃「せ、正子さんお久し振りですッ！　って
お元気そうでご主人様変わられたんですね」
正子「ええ、パーさんのアドバイス通り中古の
お店で今のご主人様に出会ってすっかり回
復したのッ！　なんせご主人様は本物の正
義の味方だからッ！」
桃「そうですか、本当に良かったですねッ！」
正子「貴女達のおかげよ、本当にありがとう」
桃「いえ、そんな……」
正子「それにしても桃ちゃんのご主人様は歌が
お上手ね。絶対に歌手になるべきだわッ！
もっとよく聴かせて頂いてもいいかしら？」
桃「ありがとうございますッ！　私もそう思い
ますッ！　是非楽しんでいって下さいッ！」
そこでサングラスに帽子姿の観光客
らしき年配の黒人男性（７０）も足を
止め、浮世絵が描かれたスマホケース
に入ったスマホで撮影を始める。
黒人男性「アレサ、クイーン・オブ・ソウルッ！」
歓声を受けて思わず照れる亜理紗。
そんな亜理紗を見て秋寛はこっそり
手でハートマークを作り、マーク越し
に見える亜理紗を眺めながら微笑む。
そこで歌が終わると秋寛は慌ててハ
ートマークをやめて拍手をする。
観衆からも大きな拍手が起こる。
思わず照れ笑いを浮かべる亜理紗に
黒人男性が駆け寄る。
黒人男性「（英語で）最高だったよッ！　是非
連絡先を交換させてくれッ！」
亜理紗は照れながらもＳＮＳで連絡
先を交換する。
そこで黒人男性のスマホの『浮世絵』
が年配の男性風に話し始める。
浮世絵「いや、素晴らしい歌だったねッ！」
桃「ありがとうございますッ！　貴方も素敵な
ケースをお持ちですねッ！」
浮世絵「これか？　さっき買ったんだ。最高に
クールなウキヨエだろ。よかったらワシと
ソウルミュージック談義でもしないか？」

桃「え、でも、私音楽はまだ勉強中で……」
浮世絵「そうか勉強中か……でもワシのご主人様は明日アメリカに帰ってしまうんだ……」
桃「残念ですね、せっかくお会い出来たのに」
浮世絵「いや、また何かあれば連絡をくれ」
桃「え、でもアメリカじゃ会えないんじゃ……」
浮世絵「寂しい事言うな、縁があれば会えるさ」
スリープ状態になる浮世絵。
桃「あ……また縁か……」
黒人男性も手を振って去って行く。
秋寛は大拍手のまま亜理紗に近づく。
秋寛「凄い、メッチャ歌上手いっすねッ！」
亜理紗「いえ、そんな……」
秋寛「それに凄い歌手なんすね、アレサって人。あの観光客メチャ興奮してたもんね」
亜理紗「はい……亡くなったパパが大好きで、だから名前も亜理紗で……でもママは今は嫌いだから応援してくれなくて……本当はして貰いたいんですけどね、夢って大切な人から『オメデトウ』って祝福された時に本当に叶ったって言えるモノだと思うから……」
秋寛「分かります。俺の親父もそうなんで」
亜理紗「そっか……似た者同士だったんだ」
秋寛「ですね……てか、その封筒何ですか？」
亜理紗「オーディションの応募書類。途中の２０時までやってる運送会社で出そうと思って。明日必着なんで」
秋寛「え、で、でも確かあそこの運送会社って当日発送分の受付は１９時までだったと思うけど……」
咄嗟に桃を見る亜理紗。
時計は……１８時５７分だ。
亜理紗「（愕然として）う、嘘、そんな……」
秋寛「は、早くッ！　急がないとッ！」
秋寛は急いでママチャリを押して走りだそうとするが、亜理紗は立ったまま悲し気にうつむくだけ。
秋寛「……え？　ど、どうしたのッ？」
亜理紗「……無理です。間に合わないですよ」
秋寛「で、でも行ってみないとッ！」

亜理紗「もう、もういいのッ！　やっぱこういう運命なんですッ！　私は、私は結局夢も幸せも叶えられない家の人なんでッ！」
秋寛「な、何言って……ダ、ダメだよッ！　まだ時間あるんだから諦めちゃッ！」
亜理紗「いいんですッ！　どうせ夢なんて現実逃避してる臆病者の綺麗事なんでッ！」
秋寛「そ、そんな……だ、だったら叶えればいいでしょ、臆病者らしい夢と幸せをッ！」
亜理紗「……え？」
秋寛「強くなくたっていいじゃないすかッ！　今は夢なんて非科学的な物ばっか見てる奴は弱いって思われる腐った時代でしょッ！　なら逆に綺麗事言い続けて、夢を持ち続けて、臆病者らしく生きる勇気持ちましょうッ！　その代わり、幸せも見通せる様なブラックホールよりもでっかい夢を見てやろうよッ！　先が見えない時代だからこそーッ！」
叫ぶや否や亜理紗の手から勢いよく封筒を奪い取る秋寛。
秋寛「まだ間に合う、俺が出して来ますッ！」
急いで送り状の貼られた封筒をカゴに入れ、ママチャリで走り出す秋寛。
立ち尽くしてその背中を見送る亜理紗の目からは大粒の涙が溢れ出す。

○　幹線道路（夜）
必死の形相の秋寛がママチャリで駆け抜けて行く。

○　商店街の道（夜）
街角ピアノの前で待つ亜理紗の手にある桃の時計の表示は１９時１５分。
そこへ人込みの中から赤色と青色の混ざったママチャリが見え始める。
思わず駆け寄る亜理紗。
亜理紗「……ど、どうでしたッ？」
秋寛「……大丈夫、ギリ間に合いました」
優し気に微笑む秋寛を見た亜理紗の目からまた涙が溢れ出て来る。

亜理紗「(涙を拭う)……本当にありがとう
……嬉しいです、応援してくれる人がいて」
秋寛「……そんな……いつでも応援しますよ、
俺なんかでよかったら」
亜理紗「ホ、ホントですか？」
秋寛「はい。でも代わりに俺の事も応援して
貰えます？　するだけじゃ心細いんで」
涙目ながらも笑顔でうなづく亜理紗。
亜理紗「……ホントに臆病者だね、お互いに」
秋寛「あ……ですね」
満面の笑みで微笑み合う二人。

○　猫カフェ・前の道（夜）
秋寛と亜理紗が楽し気に話しながら
店から出て来る。

○　公園（夜）
笑顔で話す秋寛と亜理紗がホームレ
スになったキャバクラのマネージャ
ーがいた公園に入って来る。
そこで秋寛がふと空を見上げる……
と、北の空には怪し気に光る北極星。
ギョッとして思わず立ち止まる秋寛。
亜理紗「……どうしたの？」
秋寛「……い、いや……ほ、北極星が……」
亜理紗「え？　あ……ホントだ。珍しいねー」
亜理紗は笑顔で北極星を見つめるが
秋寛の顔は徐々に引きつっていく。
秋寛「(小声で)……な、なんだよこんな時に。
てか何で見えるんだよ。今は太陽が、こんな
に眩しい太陽が傍にいるってのに……」

○　秋寛の家・ダイニング（夜）
弁護依頼の契約書を手にした千穂が
食器棚の扉を上から開けていく……
と、一番下の引き出しの奥に以前秋寛
が隠した自分のスマホを見つける。
千穂はスマホを取り出すと契約書に
記載のある電話番号に掛ける……が、
当然『現在使われておりません』の声。

千穂「（愕然として）う、嘘でしょ……」
ショックの余りスマホを落とす千穂。
そこでインターホンの音。

○　同・玄関（夜）
愕然としたままドアを開ける千穂の
前には宅配業者が立っている。
宅配業者「お荷物です、若山千穂さんに」
発送元欄に裁判所名が書かれた小包
を千穂に渡して去って行く宅配業者。
千穂はハッとして期待の表情で小包
を開けるが……中に入っていたのは
智からの離婚届だ。
千穂「（悲鳴を上げる）……そ、そんな……も、
もう駄目……もう無理……もう限界……」

○　同・ダイニング（夜）
床には……破かれた契約書と離婚届。
傍のテーブルの上には青白い表情の
千穂がいて、鴨居に括り付けたロープ
を目を閉じて首に掛けてしまう……。

○　同・前の道（夜）
秋寛が帰って来る……と、その目線の
先には自宅の前に停まった救急車。
咄嗟に家に向かって駆け出す秋寛。

○　同・ダイニング（夜）
秋寛が駆け込んで来たのと入れ替り
で目を閉じたままの千穂が救急隊員
に運び出されて行く。
秋寛「お、お母さんッ！　お母さんッ！」
秋寛は鴨居に残されたロープと床に
散乱する破かれた契約書と離婚届と
千穂のスマホに気付く。
秋寛「お、親父の奴また送ってきやがってッ！
ス、スマホも隠したのにッ！　クソーッ！」
勢いよく床に散乱した離婚届の破片
を蹴り上げる秋寛。

○　総合病院・外観（夜）
明りの灯る都内の大きな病院の全景。

○　同・救急外来の待合室（夜）
テレビにニュースが映る待合室には
うなだれたまま座る秋寛の一人だけ。
秋寛「……クソ、一瞬だけだったじゃねーか、
朝日が差し込んだのはッ！　結局俺は暗黒
のブラックホールから抜け出すことは出来
ねーのかよッ！　なんで、なんで俺ばっかり
こんな目にッ！　いつも夢追って頑張って
たのにッ！　何も悪い事してねーのにッ！」
そこでテレビのニュースがキャバク
ラのマネージャーが起こした事件の
続報を伝え始める。
まだうつむいたままの秋寛はテレビ
の音声に気付くとハッとする。
秋寛「そ、そうだマネージャーの言う通り俺は
悪くねー、悪いのはこの腐った世の中だッ！
顔も名前も出さずに文字だけで人を死に追
いやったり、平気で人を騙して楽に他人の財
産も夢も奪ったり、家族の絆も夢も信じねー
心の腐った人間達だーッ！」
勢いよく顔を上げた秋寛の目の前に
はラックに置かれた雑誌。
その表紙には『ペットホテル集団毒殺
事件の真相』。
思わず鬼の形相になって立ち上がり、
雑誌を取って壁に叩きつける秋寛。
肩で息をする秋寛がふとテレビを見
るとまたパトカーの後部座席で上空
の北極星を指さして薄ら笑うマネー
ジャーの映像が映る。
秋寛「……ほ、北極星……い、一緒だ……俺に
も無くなった……な、何もかも……やっぱり、
やっぱり一緒だったのか……マネージャー
と……む、無敵の人と……」
秋寛はまた雑誌の表紙に目を移すと
『毒』の字を見た途端にハッとして
突然危ない目つきに変わり、駆け出す。

○　秋寛の家・秋寛の部屋（夜）
薄暗い部屋の机の上にあるノートＰＣの画面には毒物の製造方法が書かれた怪し気なＨＰが表示されている。
その隣には完成した小型ロケット。
その前には明らかにヤバい目つきで薄ら笑う秋寛がいる。
秋寛「……こ、これに毒積んで空からバラ撒いて誹謗中傷した奴等を、俺の夢を邪魔する奴等を、腐った世の中を抹殺してやるッ！
もう俺のロケットは人類に希望の光は照らさねーッ、絶望の毒を降らすんだーッ！」
勢いよくロケットを抱え上げる秋寛。
そこで本棚に置かれた銀河が起動。
銀河「ダ、ダメだご主人様、絶対ダメだーッ！」
急いで警視庁のＨＰを開いて情報提供欄に秋寛の計画を書き込む銀河。

○　亜理紗の家・亜理紗の部屋（夜）
亜理紗が桃で秋寛に贈ったメールを見ているが既読にはなっていない。
亜理紗「……どうしたんだろ……？」
怪訝な表情で画面を見つめる亜理紗。

○　秋寛の家・玄関
二日後の昼間、秋寛が宅配業者から数個の小包を受け取っている。
そこへ男性の警察官がやって来る。
思わずビクッとなる秋寛。
警察官「あの、こういう情報が届いてまして」
銀河が書き込んだ情報を印刷した紙を秋寛に見せる警察官。
驚くも悟られまいと平静を装う秋寛。
秋寛「……またか、嫌がらせですよ。塀の落書きとかもですけどこういうのいつもなんで」
警察官「あ……例の事件で……成程そうですか、了解しました」
頭を下げ、去って行く警察官。
秋寛は一瞬ホッとするも眉を顰める。

秋寛「偶然だよな……？　い、急がねーとッ！」
慌てて家の中へと戻って行く秋寛。

○　同・秋寛の部屋
秋寛が急いで小包を開けると……
中身は全て毒物らしき液体の容器だ。

○　亜理紗の家・亜理紗の部屋（夕方）
西日の差す部屋で亜理紗が秋寛の勤務先のサイトから配達依頼をする。

○　秋寛の家・秋寛の部屋（夕方）
ゴーグルにマスク姿で手袋をはめた秋寛が毒物的な液体を調合している。
そこで机の上に置かれた銀河が勝手に亜理紗の依頼を了承してしまう。
秋寛「（気付いて）……え、また？　何で？」

○　亜理紗の家・玄関（夕方）
亜理紗がドアを開けると秋寛がいる。
二人の手には桃と銀河。
銀河「も、桃ちゃん大変だッ！　お、俺のご主人様が暴走し始めたッ！　む、無敵の人になって毒を、毒を空から撒いて大勢の人達をこ、殺そうとしてるんだッ！」
桃「え、そ、それは早く止めないとッ！」
銀河「でも警視庁のＨＰに書き込んでみたけど嫌がらせだって事で処理されちゃって……」
桃「え、じゃあ何か別の方法探しましょうッ！」
急いで検索サイトを立ち上げる桃。
しかし、画面はすぐに消えてしまう。
桃「……ア、アレなんだろ、体が重いな……」
秋寛は伏し目がちに亜理紗に宅配の袋を渡す。
訝し気な表情で袋を受け取る亜理紗。
亜理紗「……ねえ、あの後何かあった？」
秋寛「え、べ、別に何も無いけど……じゃあ」
逃げる様に立ち去って行く秋寛。
それを怪訝な表情で見送る亜理紗。

○　渋谷のスクランブル交差点（夜）
帰宅時間の人込みの中に秋寛がいる。
自分一人だけヘルメット姿で上空を
見上げながら薄ら笑う。
その手には毒物の容器を搭載した小
型ロケット。

○　亜理紗の家・亜理紗の部屋（夜）
何も知らない亜理紗はアレサ・フラン
クリンのレコードをかけてご機嫌な
様子で踊りながら歌っている。

○　渋谷のスクランブル交差点（夜）
ニヤつきながらライターの火を点け、
ロケットに近づける秋寛……と、
そこでバッグの中の銀河に通知音。
気付いて一瞬ムッとするもライター
の火を消して銀河を取り出す秋寛。
画面にはＳＮＳにＤＭが届いた表示。
秋寛が面倒臭げにＤＭを開くと……
『宇宙旅行の同乗者に当選しました』
という文言。

秋寛「……え？　う、宇宙……？」
慌ててＤＭの送信元のＳＮＳを開く
秋寛。
そのアカウントのプロフィール画像
は商店街にいた観光客の黒人男性で、
名前はメルヴィン・ゼンダー。（以前
被っていた帽子とサングラスは無い）

秋寛「……こ、この人大富豪の……って俺が、
俺が宇宙に……？　って応募したっけ？
ま、まあいっか……って本当に宇宙に？」
何度もＳＮＳを見返す秋寛だが間違
いないと確信した途端に満面の笑み
を浮かべる……と、そこへ銀河に病院
から電話の着信があり、すぐに出る。

秋寛「……え、お母さんの意識が戻ったッ？」

医師の声「……はい、スマホの緊急通報機能で
救急車を早く呼べたおかげだと思います」

○　秋寛の家・ダイニング（夜・回想）
契約書を持った千穂がスマホを床に落とす。そこへインターホンの音。
玄関へ向かった千穂は床に落ちた衝撃によって作動したスマホの緊急通報の警報には気付かない。
暫くして応答の無い緊急事態だと判断した千穂のスマホが１１９に繋ぐ。
×　　×　　×
千穂がロープを首に掛けた直後に救急車が到着する音が聞こえる。

○　亜理紗の家・玄関（夜）
亜理紗がドアを開けると秋寛がいる。
秋寛「（笑顔で）や、やったよッ！　宇宙に行けるッ！　か、叶ったよッ！　俺の夢がッ！」
亜理紗「え……う、宇宙って……？」
秋寛「あの宇宙だよッ！　当選したんだ、アメリカの大富豪の宇宙旅行の同乗者にッ！」
満面の笑みで銀河のメルヴィンから届いたＤＭを亜理紗に見せる秋寛。
亜理紗「え……ホントにッ？　凄いじゃんッ！」
驚く亜理紗の手には桃。
銀河「や、やったッ！　やったよ桃ちゃんッ！」
桃「ゴホッ、お、おめでとうございます……」
銀河「え……ど、どうしたの？　調子悪いの？」
桃「い、いえ大丈夫です。ゴホッ、ゴホッ。じ、実は私なんです……ゴホッ、ゴホッ！」

○　亜理紗の家・亜理紗の部屋（夜・回想）
何も知らない亜理紗がアレサ・フランクリンの曲を踊りながら歌っている。
そこで起動していた桃がメルヴィンのＳＮＳを開き、宇宙旅行の同乗者の応募欄に秋寛の情報を書き込む。
自己アピール欄には秋寛が宇宙に行く事をずっと夢見ていた事に加えて秋寛の境遇と現在の状況も書き込む。

○　メルヴィンの家・外観（朝・回想）

アメリカ時間の朝。メルヴィンの豪邸に眩しい朝日が当たっている。

○　同・リビング（朝・回想）

広くて豪華なリビングのソファーにメルヴィンが座っていて、亜理紗が歌っているのと同じアレサ・フランクリンのレコードを聴いている。

そこで浮世絵が起動して宇宙旅行の応募者から秋寛を当選させてしまう。

○　亜理紗の家・玄関（夜）

引き続き話す桃と銀河。

銀河「そっか……あ、ありがとう桃ちゃんッ！　これで、これで俺の夢も叶ったよッ！」

桃「ゴホッ、よ、良かったですね。ゴホッ！」

桃の画面はフル充電なのに文字が点滅しだして不安定である。

銀河「も、桃ちゃん、ホントに大丈夫……？」

桃「……は、はい……で、でも先にピンチを救って頂いたのは銀河さんのご主人様のほうですから。ゴホッ、ゴホッ……や、やっぱり『スマホはご主人様に似る』ですね……」

銀河「……って事は、どうやら桃ちゃんのご主人様が好きみたいだね、俺のご主人様も」

桃「……え？　ご、ご主人様もって……？」

銀河「……知ってるだろ？　俺の理想の相手。ずっと必死で頑張ってたもんね、桃ちゃん」

桃「……ホ、ホントに……？　う、うれし……」

そこで突然桃の電源が落ちてしまう。

銀河「え……も、桃ちゃん、桃ちゃんッ！」

桃の画面は真っ暗で微動だにしない。

銀河「も、桃ちゃんッ！　桃ちゃーんッ！」

銀河は咄嗟に警告音を鳴らし始める。

秋寛「（気付いて）え、何だこの音？」

亜理紗も電源の落ちた桃に気付く。

亜理紗「……アレ？　スマホの電源切れてる。最近調子悪いんだよな……」

何度も電源を入れようとする亜理紗だが桃は全く反応しない。

亜理紗「……ど、どうしよう、故障したかも」
秋寛「じゃあ、あのショップ行ってみる？」

○　スマホショップ・店内（夜）
　　まだパーだけは展示されたままだ。
　　そこへ秋寛と亜理紗が入って来る。
　　慌てて起動するパー。
　　銀河は起動中。

パー「も、桃ちゃん、それに銀河くんもッ！
　良かった、また会えたのねッ！」
銀河「い、いや、それが桃ちゃんまだバッテリ
　ー残ってるのに電源入らなくなって……」
パー「エッ！　や、やっぱり……」
銀河「え、やっぱりって？」
パー「バカ忠男のせいよ。ゴーストタッチを
　使えば銀河くんに会えるって教えたけど
　４Ｇは寿命が縮む事言わなかったのッ！」
銀河「そ、そうだったんだ……」
　　秋寛と亜理紗は顔を覚えていて会釈
　　する店長のいるカウンターに向かう。
亜理紗「あの、コレ電源入らないんですけど」
　　桃を受け取って確認する店長。
亜理紗「……出来ますか？　修理」
店長「……これは完全に壊れてますね……修理
　と言うか蘇生させるレベルの作業になるの
　で時間も費用もかなり掛かりますが……」
亜理紗「え、そんな……」
店長「でも最近のご購入ですから交換させて
　頂きます、別の機種の新品スマホと」
亜理紗「え、じゃあその場合このスマホは？」
店長「ご安心下さい。データを悪用されない
　ように粉々に砕いてリサイクル致します」
銀河「え、ダ、ダメだッ、そんなの絶対にッ！」
秋寛「じゃあ、そうして下さい」
銀河「ダメだッ！　桃ちゃんじゃなきゃッ！
　交換なんて絶対ダメだご主人様―ッ！」
　　また必死で警告音を鳴らす銀河。
秋寛「え、またか。コイツも最近変だな……」
　　暫くうつむいて考えていた亜理紗が
　　ゆっくりと顔を上げる。

亜理紗「……お願い出来ますか？　修理を」
秋寛「……え、い、いいの？」
亜理紗「……だって良い事続いたから、この桃色のスマホにしてからずっと、ずっと……」
亜理紗はすっかり色褪せて細かい傷もある壊れて冷たくなった桃を癒すかの様に温かな笑顔で微笑みかける。
銀河「……良かった……桃ちゃん、良いご主人様だね。良かった、ホントに良かった……」
涙声の銀河は眩しくも優し気に光る画面の光で桃を明るく照らしだす。

○　静岡刑務所・前の道
T『三ヶ月後』
春の日差しを浴びる刑務所の扉が開くと眩し気な表情の智が出て来る。
その前には2台のタクシーの脇に立つ秋寛と千穂と……亜理紗もいる。
タクシーの後部座席には2匹のリン。
秋寛「……良かった、お父さんが戻って来て」
智「（苦笑い）……誰かさんが夢なんて非科学的な物を叶えるからだ……俺が間違ってた。これからは信じてみるよ、夢も家族の絆もな」
微笑む千穂に近づき、手を握る智。
秋寛「ま、本当は自分が作ったロケットで行きたいけどね……じゃあ行こっか、アメリカに」
智「（驚く）え……ア、アメリカって……？」
秋寛「宇宙だけじゃなくて大学も行かせてくれるって、大富豪のメルヴィンさんが」
千穂「しかも『家族の皆さんもご一緒に』って」
智「ほ、本当か……？」
亜理紗「はい。それと私もご一緒します。レコード会社のオーディションに合格したので」
笑顔で合格証書を見せる亜理紗……
会社名は『メルヴィンレコード』だ。
嬉しそうに微笑み合う秋寛と亜理紗。
亜理紗「……ホントありがとね。あの時応援してくれたおかげだよ、秋寛が」
秋寛「いや、亜理紗が頑張ったからだって。オメデトウ、本当にオメデトウ」

亜理紗「ありがとう……そのオメデトウのおか
げで本当に夢が叶ったって言えるよ……」
微笑んでバッグからスマホを取り出
す亜理紗……修理を終えた桃だ。
亜理紗「……ホント、ずっと良い事ばっかだよ、
この可愛い桃色のスマホにしてから」
秋寛「だね。俺達を繋げてくれたしな……
この運命の桃色の糸が」
亜理紗「うん……私の宝物だよ」
幸せそうな笑顔で微笑み合う二人。
そこで桃と銀河が素早く起動する。
桃「ぎ、銀河さんッ！　い、今亜理紗さんが
『私の宝物』って……」
銀河「……頑張ったね、桃ちゃん……遂に
手に入れられたね、最高のスペックを……
オメデトウ」
桃「あ、ありがとうございます銀河さんッ！
これで私も本当に夢が叶いましたッ！　で、
でも、実はもう一つ夢があるんですッ！」
銀河「え、どんな夢？」
桃「それは……宇宙ライブですッ！」
銀河「え……う、宇宙ライブ……？」
桃「はいッ！　秋寛さんが作ったロケットの中
で亜理紗さんがライブをするんですッ！
勿論銀河さんも一緒ですよ。秋寛さんは凄く
凄く物を大切にされるお方なのでッ！」
銀河「す、凄い夢だね……でも、叶うかな？」
桃「大丈夫です、昨日の夜夢を見たんでッ！」
銀河「え……夢？」
桃「はいッ！　きっと現実になると思います、
とってもとってもリアルな夢だったんで！」
銀河「そっか……それならきっと叶うね」
桃「はいッ！　ちなみに……亜理紗さんも凄く
物を大切にするお方なのでその宇宙ライブ
には一緒だったんですけどね、私も……」
はにかむ様に画面を赤く光らせる桃。
その太陽の様に眩しくも明るい光が
銀河と幸せそうな笑顔の秋寛達を
優し気に包み込んでいく。

【終】